

東京学芸大学 辟雍会 機関誌

Hekiyou

2025 vol.22



辟雍



東京学芸大学 辟雍会 機関誌

Hekiyou

2025 vol.22

目次

● 会長挨拶	馬淵 貞利	2
● 沿革		3
● 支部設立状況・支部便り		4
● 支部連絡先一覧		11
● 会員から①	布施 絢子	12
● 会員から②	高橋 丈夫	14
● 会員から③	柴田 健一郎	16
● 会員から④	松尾 敏子	18
● ホームカミングデー講演	立花 義裕	20
● 特別寄稿	柏瀬 省五	24
● 令和7年度 学校訪問事業		28
● 辟雍会諸規程（支部活動支援及び学生表彰）		30
● 2025年度各部活動報告		32
● 「辟雍」の由来 あとがき		34



プレイパーク秋景（附属小金井幼稚園舎の西）
連日のように近所の子供たちの遊び場として賑わっている。





2025年
会長挨拶

光陰矢の如し



馬淵 貞利

「光陰矢の如し」…近ごろは世相の変化があまりにも激しく、ついこの前まであたりまえであったものがすぐに過去のものとなってしまいます。私たちの身の回りにあったワープロしかり、ラジカセしかり、フィルムカメラしかりです。もちろん、多くの人にとって、この言葉の真の意味は自分の身近で起きる変化によって実感されることでしょう、身内や友人が亡くなるとか、自分の身体のどこかに違和感を覚えるとかして。しかし、どうやらこれは私たち自身の時間認識の問題でもあるようです。一日が非常に短く感じられるのは高齢者に共通する特徴だと言われますが、人間は高齢化するにつれてその日の体験を比較的長い時間軸で大掴みに認識するようになるのだそうです。そのことは裏を返せば、人間は歳を取ると体験した全ての事柄を細かく認識できなくなることを意味します。そのメカニズムはまだよく分かっていませんが、人間の時間認識は脳内各器官のネットワークによって生みだされると言われていますから、そのどこかに支障が生じるのかも知れません。

ちなみに、「光陰矢の如し」という言葉は、中国唐代の詩人李益の作品中にあるとか、中国禅僧の偈頌（げじゆ）に発すると言われています（原文には「光陰似箭」と表現されています）が、時間の流れの速さに対する驚きにも似た感懐は、今も昔も、また中国であれ日本であれ、変わりません。これを「少年易老学難成 一寸光陰不可軽」という教訓論的な議論に仕立てたのは室町時代の禅僧のようで、さらにこれを南宋の朱熹作と偽装して学校教育の場に持ち込んだのは日本の明治政府のようです。

最近、私は辟雍会の活動についても同じような感懐を覚えることがあります。辟雍会は、東京学芸大学との関係が成立した時点から生涯にわたって会員であり続ける組織です。学芸大学に在学（在職）中はさまざまな企画に参加したり、支援を受けたりする組織であり、大学を卒業後、仕事や子育てに忙しい時期にはしばらく疎遠になりがちな組織であり、退職したり高齢化して人生を振り返る余裕ができる頃には、大学時代を回想したり、同僚や同学の人々と再び交流を深める場でもあります。このように辟雍会に対する係わり方は、それぞれの人の学芸大学に対する思いやその人が現在置かれている立場によって異なってきます。そのため辟雍会の活動は多面的かつ多様なものでなければなりません。前回、私は

辟雍会の体制について述べましたが、それは人事サイクルの問題にとどまらず、活動スタイルの見直しの問題でもあります。

翻って見ますと、東京学芸大学も永久不変のものではありません。今も年々歳々学芸大学の姿は変化し続けています。辟雍会創立時と比べても、その変容ぶりに驚く人も少なくありません。そのため、辟雍会は常に東京学芸大学の実情を見守りつつ、大学に対する支援の在り方を考えていく必要があります。つまり、「オール学芸の会」である辟雍会は、すべての会員に対して配慮が行き届いた緻密な活動を展開する一方で、東京学芸大学が日本の教員養成を担う中心的な大学としての役割を果たせるように、いっそう密接に大学と連携していく必要があるということです。また、そのためには辟雍会の各部会をさらに充実させなければなりませんし、全国の支部と連携して学芸大学の知名度を高める創造的な活動を展開していく必要もあります。関係者各位のさらなるご支援、ご協力を切に希望する次第です。

最後に一つ、閑話休題。私の住所の近くに京王百草園があります。建屋も庭も小ぢんまりとしたところですが、毎年春先になると必ずと言っていいほど足を運びたくなる場所です。園内に漂うほのかな梅の香りに包まれていると自然に気持ちも和んできます。ここには芭蕉の句碑や若山牧水の歌碑などもあって、そこはかたなく情趣を醸し出していますが、なかでも私が気に入っているのは、次の二つの牧水の短歌です。

- ・拾いつるうす赤らみし梅の実に
木の間ゆきつつ歯をあてにけり
- ・小鳥よりさらに身かろく美しく
かなしく春の木の間ゆく君

「木（こ）の間（ま）」という音の響きが春先の梅園の光景と見事にマッチしています。二首目の「かなしく」という語から失恋をした牧水の心象を読み取る人もいるようですが、私の脳裏には跳ねるように園内を歩く女性の愛らしい姿が浮かんできます。

ともかく、百草園は私にとって東京名所の筆頭格です。

沿革

- 2003.11.03 (平成 15) 「辟雍会 (東京学芸大学全国同窓会)」創立
- 2003.11.03 (平成 15) 荒尾禎秀会長就任
- 2003.12.07 (平成 15) 青森県支部設立
- 2005.07.02 (平成 17) 石川県支部設立
- 2005.08.22 (平成 17) 富山県支部設立
- 2005.10.01 (平成 17) 岩手県支部設立
- 2006.02.25 (平成 18) 千葉県支部設立
- 2006.04.01 (平成 18) 荒尾禎秀会長再任 (2 期目)
- 2006.10.01 (平成 18) 島根県支部設立
- 2007.06.24 (平成 19) 高知県支部設立
- 2008.04.01 (平成 20) 長谷川貞夫会長就任
- 2009.08.01 (平成 21) 北海道支部設立
- 2009.10.31 (平成 21) 東京学芸大学創立 60 周年記念シンポジウムを本学と共催
- 2010.04.01 (平成 22) 鷺山恭彦会長就任
- 2011.01.29 (平成 23) 岡山県支部設立
- 2011.02.27 (平成 23) 鳥取県支部設立
- 2011.03.26 (平成 23) 静岡県支部設立
- 2011.08.28 (平成 23) 新潟県支部設立
- 2011.10.30 (平成 23) 広島県支部設立
- 2011.11.26 (平成 23) 神奈川県支部設立
- 2012.04.01 (平成 24) 鷺山恭彦会長再任 (2 期目)
- 2012.08.17 (平成 24) 山梨県支部設立
- 2012.10.07 (平成 24) 鹿児島県支部設立
- 2013.07.27 (平成 25) 群馬県支部設立
- 2013.11.02 (平成 25) 本会を「東京学芸大学辟雍会」と改称
本会創立 10 周年記念祝賀会開催
- 2014.03.15 (平成 26) 佐賀県支部設立
- 2014.04.01 (平成 26) 鷺山恭彦会長再任 (3 期目)
- 2014.06.15 (平成 26) 栃木県支部設立
- 2014.10.11 (平成 26) 熊本県支部設立
- 2014.11.08 (平成 26) 大分県支部設立
- 2015.05.31 (平成 27) 埼玉県支部設立
- 2016.02.20 (平成 28) 宮崎県支部設立
- 2016.04.01 (平成 28) 馬淵貞利会長就任
- 2017.09.14 (平成 29) 韓国支部設立
- 2018.04.01 (平成 30) 馬淵貞利会長再任 (2 期目)
- 2018.08.17 (平成 30) 香川県支部設立
- 2019.08.30 (令和元) 福井県支部設立
- 2020.02.22 (令和 2) 宮城県支部設立
- 2020.04.01 (令和 2) 長谷川正会長就任
- 2022.04.01 (令和 4) 長谷川正会長再任 (2 期目)
- 2023.04.01 (令和 5) 兵庫県支部設立
- 2023.12.03 (令和 5) 長野県支部設立
- 2024.04.01 (令和 6) 馬淵貞利会長就任
- 2024.11.02 (令和 6) 本会創立 20 周年記念祝賀会開催



番号	名称	設立年月日
1	青森県支部	2003.12.07 (平成 15)
2	石川県支部	2005.07.02 (平成 17)
3	富山県支部「獅子の会」	2005.08.22 (平成 17)
4	岩手県支部	2005.10.01 (平成 17)
5	千葉県支部	2006.02.25 (平成 18)
6	島根県支部	2006.10.01 (平成 18)
7	高知県支部「高知辟雍会」	2007.06.24 (平成 19)
8	北海道支部	2009.08.01 (平成 21)
9	岡山県支部「岡山辟雍会」	2011.01.29 (平成 23)
10	鳥取県支部	2011.02.27 (平成 23)
11	静岡県支部「静岡辟雍会」	2011.03.26 (平成 23)
12	新潟県支部	2011.08.28 (平成 23)
13	広島県支部「広島辟雍会」	2011.10.30 (平成 23)
14	神奈川県支部	2011.11.26 (平成 23)
15	山梨県支部	2012.08.17 (平成 24)

番号	名称	設立年月日
16	鹿児島県支部	2012.10.07 (平成 24)
17	群馬県支部「群馬辟雍会」	2013.07.27 (平成 25)
18	佐賀県支部	2014.03.15 (平成 26)
19	栃木県支部	2014.06.15 (平成 26)
20	熊本県支部	2014.10.11 (平成 26)
21	大分県支部	2014.11.08 (平成 26)
22	埼玉県支部	2015.05.31 (平成 27)
23	宮崎県支部	2016.02.20 (平成 28)
24	韓国支部「韓国辟雍会」	2017.09.14 (平成 29)
25	香川県支部	2018.08.17 (平成 30)
26	福井県支部	2019.08.30 (令和元)
27	宮城県支部	2020.02.22 (令和 2)
28	兵庫県支部	2023.04.01 (令和 5)
29	長野県支部	2023.12.03 (令和 5)

宮城県

辟雍会宮城県支部は、2020年（令和2年）2月に設立。現在、会員は39名です。会員の勤務先は、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・大学等の学校や、教育委員会等の行政機関、民間企業と様々で、退職組のOB・OGも元気に参加しています。

今年度は、11月29日に第4回総会・親睦会を仙台駅前にて開催し、参加者一同楽しいひと時を過ごしました。会では、総会に引き続き高橋会長による「明治以降の体育・スポーツの発展とその課題」と「白石におけるスポーツの夜明けとテニスの発展」についての講話、事務局長による全国代表者会議の報告と当日の大学構内や国分寺駅周辺のスライド上映が行われ、初参加の3名を歓迎して会員相互の親睦を深めました。最近の学び舎の様子や国分寺駅周辺の変貌、在学していた頃の暮らしやサークル活動、卒業間際のハプニング、初参加の会員が教え子だった等、参加した皆さん

の熱き語りと思ってもよらないサプライズトークに、とても盛り上がりました。

これからも東京学芸大学の同窓という絆のもと、新たな会員を迎えてネットワークを広げ、チームワークを更に高めていく会にしていきたいと考えます。

事務局長 堤 英俊
(昭和60年A類学校教育科卒)



第4回 辟雍会宮城県支部総会・懇親会

北海道

去る8月9日(土)に第17回辟雍会北海道支部総会と交流会を開催しました。今回は札幌を飛び出し、同窓でもあるWBC監督を務めた栗山英樹氏の自宅がある栗山町で行いました。札幌では普段参加が難しい方々の参加を期待しての新たな試みでした。当日は、14名の同窓生とご家族も合わせ、例年よりも多い19名の参加をいただきました。天候にも恵まれ、会場の近くでは夏祭りも開催されており、とても楽しい一日となりました。

まずは支部総会で新役員体制や会計等の承認後、地元の銘菓をいただきながらの自己紹介。今回たくさんの「初めまして」や、「お久しぶりです」の出会いがありました。また、大学時代の思い出や北海道に来てからのことなどを互いに語り合うなかで、同じ部の先輩後輩の間柄が判明するなど、「ご縁」を感じる一幕もありました。時代を超えて「東京学芸大学」の「ご縁」で繋がりが合うことができる同窓会の有難さや面白さを実感したひとときでした。

総会後は、今回の目玉である栗の樹ファームの見学、地元の銘醸・小林酒造の酒蔵見学を行いました。特に

栗の樹ファームでは、コロナ禍以来見学中止となっていた所を、栗山氏の特別なご厚意で受け入れていただきました。残念ながら多忙を極める栗山氏にお会いすることは叶いませんでしたが、野茂選手直筆サイン入り帽子など数々の「お宝」を見ることもできました。さらには冷たいお飲み物やお土産までご用意いただいている(参加者一同驚き!)といった、栗山氏の温かいお人柄にも触れられました。

さて、来年は旭川市での開催予定です。広い北海道支部ですが、毎年趣向を凝らしながら今後も支部同窓会を行っていく所存です。末筆ながら、辟雍会の益々の発展と会員の皆さまのご健勝をご祈念申し上げ、今年度の北海道支部報告とさせていただきます。

会長 細川 隆 (S48年卒)



青森県

青森県支部は平成15年に第1号支部として設立し、県内在住の同窓生74名の会員で活動しております。毎年夏季には支部総会を「青森市・八戸市・弘前市」の3市の持ち回りで開催し、会員の親交を深めています。令和7年7月に八戸市で開催した支部総会では12名の会員が集いました。今回数年ぶりの出席となった会員は、仕事と育児の両立中とのことで、地元での開催で出席が叶ったとの話もありました。このように県内3市での開催により、各地域の会員の出席が増え、久々の再会に盛り上がる場面もありました。

ここ数年は会員間の声掛けにより、青森県に帰ってきた若手の会員数が増加しています。今後事務局としましては、研修会等支部活動の機会を設けること、支部総会への参加人数を増やすことを検討しています。会場や実施時期等を工夫し、会員相互の交流を深める

機会を作れるよう、今後も支部の取り組みを企画していきたいと思っております。

また令和8年10月には49年ぶりに本県での開催となる青の煌めきあおもり国スポ(第80回国民スポーツ大会)が開催されます。全国の会員の皆様におかれましても、トップアスリートによる試合観戦のため本県にお越しいただき、自然・歴史・文化・食・物産等の青森県の様々な魅力に触れていただければと思います。お待ちしております。

事務局長 今 捷覚
(平成26年A類保健体育選修卒)



令和7年懇親会 八戸にて

❁ 栃木県 ❁

辟雍会栃木県支部は、「栃木県の教育・文化・スポーツの発展を支援する東京学芸大学同窓生の会」です。2014年6月15日に設立しました。2026年は、設立12年目になります。今まで毎年、支部総会・懇親会は、宇都宮市内のホテルで開催してきましたが、昨年、2025年は、足利市で、懇親会を開催しました。今後は、佐野市、栃木市、小山市、鹿沼市、日光市など、それぞれの市に住む同窓生が参加しやすいように、それぞれの市で懇親会を開催します。栃木県内で活躍

する東京学芸大学の卒業生・修了生のみなさん、栃木県支部総会・懇親会に集い、情報交換をし、語り、和気あいあい、互いに励ましあえば、気分は爽快になります。新しい力が湧いて、元気が出ます。新しく、栃木県内で活躍する東京学芸大学卒業生・修了生のみなさん！みなさんのご入会を心よりお待ちしております。

支部長 柏瀬 省五



平成6年8月 辟雍会栃木県支部総会・懇親会

❁ 千葉県 ❁

千葉県支部は、船橋市や千葉市、鎌ヶ谷市、市川市、柏市などに在住または勤務する卒業生の団体です。現在の会員数は40名くらいで、県内の教職員の方、企業にお勤めの方、すでに退職され、今でも教育に携わっている方など、職種も年齢も様々です。毎年、会員からの声掛けにより、会員数を増やそうとしています。

年1回の定期総会懇親会では、在学当時の思い出や卒業後から今日までの状況、近況報告などを交換しています。また、現管理職や管理職で退職された諸先輩からは、若手の会員の方々の悩みを受けたり、将来に対するアドバイスや異動の際の相談も受けたりしています。

大学時代に同じキャンパスで学んだ仲間ですので、上司に相談する前に、気軽にアドバイスを受けるといったケースも出てきました。

県内には、私たち千葉支部とは別に高校の管理職の団体もありますが、千葉支部へ入会希望の学生諸

君は、下記の連絡先でお待ちしています。

千葉県支部会長

石井 康雄 (元船橋市立金杉台小学校長)

自宅住所：船橋市前貝塚町 1010-18

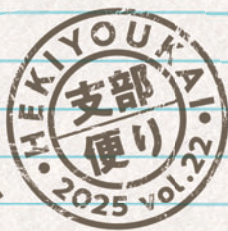
電話番号：047-438-9380 (自宅)

090-3472-3788 (携帯)

石井は、教員養成講座(通称 万ゼミ)の講師をしていますので、教師を目指す目指さないにかかわらず、気軽に声をかけていただき、学生さんの入会をお願いします。人から人へのつながりを大切に、今後も支部拡大を目指します。



ふなばしアンデルセン公園内の風車



❀ 神奈川県 ❀

「共に生き合うを心して・・・」
熱き心を深め合う辞職会神奈川県支部

教育界の様々な変化に心悩ます日々です。辞職会神奈川県支部は今この時、現場を注視した援助の大切なことを痛感しております。コロナコロナ、インフルエンザ、と様々な状況です。「隣にいてもメッセージがメールで来る」「みんな早く帰って言葉を交わす機会が少なくなった」「研究授業後の心熱い協議会が少なくなった」…、互いに対面しての心通わせる機会が、本当に少なくなりました。

この思いを秘めての今年度の総会でした。総会後の懇談会では「ネパール人から見た日本の教育事情(多文化共生社会の現状)」についてメリタ・セレスタさんを迎えてワイワイガヤガヤと意見交換し、「心熱き思いの籠った生きるを大切に」との理解となりました。

11月1日のホームカミングデーには、小金井キャンパスに教職相談ブースも企画しました。支部役員会も数回開催し、支部だよりを発行し、これからも共に生き、共に学び、共に楽しみ、心とまし合える場を大切に参ります。

Facebook や SNS で情報を伝え、会員に支部だよりを配信していますが、最近卒業した方々と連絡が取れていませんので、是非ご一報ください。

支部長 萱野 政徳



懇談会を終えて

(話題を提供：メリタ セレスタさんとネパール風の挨拶をしながら)

(2025.11.22. 本部から辞職会松村茂治幹事長を迎えた支部総会后)

各SNSのURLが表示されます→



❀ 長野県 ❀

長野県支部は松本市で、令和7年12月7日に第3回の総会を開催しました。本会は令和5年に会員20名で設立されました。令和6年には3名が加わり、総会は13名が参加しました。本年度は現職29名、教職を退いた方4名に声をかけたところ、県下各地から15名が集い楽しいひと時を送ることができました。

懇親会では、すぐに学生時代の話が始まります。仕事をしている時の表情とは違い、この時ははしゃいで笑っています。西国分寺、武蔵小金井、吉祥寺等の居酒屋の名前が聞こえてきます。「俺もその店に行った」と話に加わる人もいます。盛り上がってきたところで、少しまじめに近況報告に入りました。ところが、当時の学生番号から自己紹介を始め、学芸

大学時代の思い出話を語る方もいます。部活やサークル、バイトの話などです。教育実習や勉強に打ち込んだ話はほとんどありません。近況報告は現在の仕事を話すのみでした。

偶然にも、ホテルの催しに参加していた方が、入口に設置されている「東京学芸大学同窓会(辞職会)長野県支部総会」の案内看板を見て、「私も入りたい」と声をかけてくださいました。盛り上がっている会場に案内し、皆さんに紹介しました。参加者といきなりの入会者の16名で東京学芸大学への愛着を感じた瞬間でした。

来年の再会を念じ、ピースポーズで今年の総会を閉めました。

事務局 岩瀬 晴雄



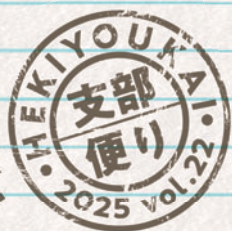
兵庫県

阪神淡路大震災から30年目を迎えました。神戸の街も当時の面影はなく、中心地である三宮駅周辺もリニューアル工事が進んでいます。

さて、「辟雍会兵庫支部」が、2023年3月12日（日）に、設立されてから2年がすぎました。今年度、3つのうれしいことがありました。一つ目は、3月にインスタグラムを開設しました。フォロワーは、一桁ですが、徐々に広がることを楽しみにしています。二つ目は、7月18日（金）に初めて懇親会を開催いたしました。残念ながら、参加は5名でしたが、神戸港に望むピアガーデンテラスで、開催しました。参加者はみんな前期高齢者で、昭和の話で盛

り上がりました。この日は、東京学芸大理事で、前東京学芸大学理事・副学長の松田恵二先生（現親和大学 親和大学 学長）をゲストとして招待しましたが、残念ながら急な公務のため欠席でした。三つ目は、兵庫教育大の井澤信二先生が、今年度から会員となりました。先生は、特別支援教育の専門です。このように、あゆみは小さいですが、継続していくこと大切にしていきたいと思います。

支部長 小坂明



辟雍会
HEKIYOUKAI

岡山県

令和7年2月8日（土）に第13回東京学芸大学岡山辟雍会を開催しました。

今年も、コロナやインフルエンザ等の影響があり11名の参加ではありましたが、懐かしく楽しいひとときを過ごすことができました。今回は、香川県の山本修先生にゲスト参加していただきました。初めて参加していただいた方もおられ、少しずつではありますが会の広がりを感じることができました。また、会の開催中に岡山辟雍会のLINEグループを立ち上げることができました。次回は、20名以上の参加を目指して企画していきたいと思っています。

また、昨年11月の辟雍会総会に会長の竹内先生と学芸大学を訪れた際、正門横の20周年記念飯島同窓会館に植樹されている「醍醐桜」と北門近くにある「岡山県木のアカマツ」が大きく成長している姿を見

ることができ、大変うれしく思いました。この桜と松は、平成29年に学芸大から植樹の依頼があり、送らせていただいたものです。想像以上に大きく成長しており、大切に管理していただいていることに感謝します。

皆様なかなかお忙しい時期で、小中高大そして会社のそれぞれの行事もあり、日をあわせるのが難しい状況です。皆様のご意見をお聞きし、できるだけ大勢の方が参加していただける時期に会を開催できるように、尽力していきたいと思っています。

事務局長 宰相 裕一



❀ 大分県 ❀

新たな仲間を求めて
ほっとするつながりの
「おんせん県おおいた」から発信

大分辟雍会が設立されてから今年で12年目を迎えることができました。平成26年の設立当初、わずか5名の会員でスタートした小さな会でしたが、辟雍会役員様をはじめ事務局の皆様方のご指導やご支援をいただきながら、現在48名の会員の方々と連絡を取り合えるようになりました。本当にありがとうございました。今年度の会合については、令和8年1月31日に大分市のアートホテル大分において第12回総会及び懇親会を開催することができ、15名の同窓生の参加がありました。松井督治国東市長様をはじめ久しぶりに再会した方々や初めて参加して交流した方々が、お互いに年1回の再会の思いやそれぞれの大学時代の思い出話を語り合いながら、楽しいひとときを一緒に過ごすことができました。総会の後に開催された懇親会の中では、参加した方々が各界でご活躍されている近況の紹介や年代を超えた懐かしい学生時のエピソードから郷土の話題まで広がり、時間を忘れてしまうほどの充実した会と

なりました。限られた短い時間ではありましたが、参加された会員さん方は、次回参加の約束もし合いながら親睦を深め、学友としての絆を深めることができました。大分県では、「田舎暮らし日本一」を目指し、大分県の魅力を情報発信しています。他支部の皆様も、九州への旅の途中に是非お立ち寄りいただき「田舎暮らし日本一のおおいた おんせん県おおいた」の魅力を体感してみませんか。お待ちしております。

支部長 瀬口 卓士



❀ 宮崎県 ❀

令和8年1月24日(土)、宮崎観光ホテルにて支部総会を開催いたしました。令和卒の20代から80代の大先輩まで、総勢22名の同窓生が集結。特筆すべきは、約3割が初参加という、フレッシュで活気ある会となったことです。

矢野久紀支部長の挨拶で幕を開けました。続いて宮崎市教育長を務める黒木貴副支部長の乾杯発声で宴が始まると、昭和・平成・令和の卒業生が驚きと懐かしさを共有し、あちこちで「学芸の輪」の花が咲きました。

今回のテーマは「アップデート」。40年前のアルバムや最新の入試要項などを展示。また持続可能な運営を目指し、事務局機能もアップデート。「登録のフォーム化」や掲示板としての「LINEオープンチャット導入」など、デジタル上での繋がりも強化し、会員の利便性を高めました。

締めくくりはいつもの「学生歌」を熱唱。濃密で温かい時間は瞬間に過ぎ、「次回はさらに多くの仲間を！」と再会を誓って閉会しました。この熱気を持続させるべく、宮崎県支部は新たな一歩を踏み出します。

支部長：矢野 久紀 (S 41 甲 保健)
副支部長：押方 修 (S 60 A 数学)
副支部長：黒木 貴 (S 61 A 社会)
事務局長：村中田 博 (H 7 A 保健)
E-mail：hm110629@gmail.com

同窓会登録フォーム・URL：
<https://forms.gle/V48rjyxzozMtCPwG8>



❀ 鳥取県 ❀

令和7年度の辟雍会鳥取県支部総会は、令和8年1月24日に計画しましたが、大雪のため残念ながら延期することになりました。楽しみにしていただいていた会員みなさんに、大変申し訳なく思っています。雪がなくなり新年度を迎えてから、再度、計画する予定です。

さて、辟雍会鳥取県支部の設立は平成23年ですが、実は「東京学芸大学鳥取県の同窓会」は、平成元年から始めています。発足当時、大先輩の先生方から同窓会事務局を命じられ、学校関係をはじめ各所から口コミ情報をかき集めて第1回の開催にこぎつけたことを、よく覚えています。第1回の会員は40名ほどであったと記憶しています。現在は、約130名とかなりの人数になっています。

年1回の同窓会ですが、会員みなさんへの連絡や、当日の運営をどうしようかと会長や何人かの有志と話し合いを重ねました。参加された会員の近況報告はもちろん、誰かゲストを呼べないかという年もあり、野球部つながりで栗山英樹監督（当時、ヤクルトスワローズ）をお招きしたこともあります。写真は、

その時の様子です。

私事ですが、栗山監督とはほぼ同世代で、同級生の野球部の友人の応援に神宮球場に行ったことがあり、その折に、栗山選手の応援もしました。球場の外でしたが、原辰徳選手の姿も見かけました。懐かしい思い出です。

辟雍会鳥取県支部は、今後も会員みなさんとのつながりを大切な宝物として、活動を継続していきますので、よろしくお願いします。

支部会長 小椋 博幸



❀ 高知県 ❀

支部活動ができない状況が続いておりますが、支部の方々同士の繋がりもしっかりしており、学芸大の卒業生の情報が事務局にも多く届いています。

高知県に在住されている方で、この「支部だより」のスペースを読まれた方は、支部長の宮地か事務局の中山のメールアドレスまたは携帯電話まで連絡をいただきたいです。また、高知県内の学芸大卒業生所在の情報がある場合にも連絡をください。

過去に実施した懇親会参加者は次の方々です。1974年卒D類保体科 宮地 彌典（高知支部長）、1975年卒D類書道科 大西 正子、1977年卒D類保体科 柚村 誠（副支部長）、1977年卒D類美術科 西 緑、1985年卒D類数学科 黒瀬 忠行、1988年

A類保体科 宇賀 孝篤（副支部長）、1988年卒A類理科 若江 卓恭、1989年卒D類保体科 西内 一人、1992年卒N類生涯スポーツ科 池添 伊佐子、1994年卒A類数学科 田所 良夫、1990年卒B類数学科 松山 宰、1990年卒D類数学科 中山 泰志

[支部長] 宮地彌典（1973年度卒 D類保体科）

TEL:090-5911-5088

メールアドレス : m-hirosuke @ miyajigakuen.jp

[副支部長] 柚村 誠（1977年度卒 D類保体科）

宇賀孝篤（1988年度卒 A類保体科）

[事務局] 中山泰志（1990年度卒 D類数学科）

TEL:090-4976-9220

メールアドレス : k_kobun4769 @ docomo.ne.jp

❀ 佐賀県 ❀

佐賀支部です。構成人数は、ようやく10名固まってきました。来たる12月27日に6年ぶりに懇親会を行います。教育関係が8名と、他の支部と同じような構成になってきました。学芸大OBを探すがなかなか難儀でしたが、うちの職場にいました！など、支部員それぞれがアンテナを張っていて、今後が楽しみです。支部員もセカンドキャリアに移っている方もおり、佐賀県の教育業界という視点ではなく、同窓生として昔を懐かしみながら、先の情報交換を積極的にしていこうという趣旨に変わりつつ

あります。メールではなかなかつながれなかったのですが、LINEを通じて支部員全員と連絡を取ることができ、ようやく連絡系統が確立しました。

事務局長 小松原 修



①北海道支部 連絡先 高橋 健一

TEL : 090-6447-2188 E-mail : kenictory2000@yahoo.co.jp
カムバック・サーモン!
北の大地(北海道)は、皆さんの凱旋を待ってまーす。

②青森県支部 連絡先 今 捷寛

TEL : 080-1676-0802 E-mail : hekiyoukai.aomori@gmail.com
学芸大青森キャンパスでは、同窓生が楽しく友好を深めています。
夢の続きを青森で。まずは連絡ください。

③岩手県支部 連絡先 中村 和平

TEL 090-8928-9837 E-mail : nakazohira8@gmail.com
世界で活躍するアスリートを生み育てた故郷岩手で、一緒に可能性
豊かな児童生徒の夢実現の応援をしましょう。

④宮城県支部 連絡先 堤 英俊

TEL : 090-5351-1602 E-mail : hekiyou.miyagi@gmail.com
卒業・修了おめでとうございます。
宮城の教育のために はやくこっちゃん来てがんばってけれ!!

⑤栃木県支部 連絡先 柏瀬 省五 (かしわせ しょうご)

TEL : 0284-62-6229 E-mail : shogochan@nr2.so-net.ne.jp
故郷へのUターン、心から歓迎。故郷の教育、文化、スポーツ、み
んなで楽しみながら、発展させよう。待ってるからね!

⑥群馬県支部 連絡先 須永 智

TEL 0270-64-6861 E-mail : sunagashishi@gmail.com
群馬県支部では、夏を目処に、支部総会・懇親会を予定しています。
卒業生は学校に一人ないし二人です。ぜひ、横のつながりを作って
行きましょう。

⑦埼玉県支部 連絡先 阿部 博之

TEL : 048-862-6857 E-mail : h-abe618@xa2.so-net.ne.jp
「ころろ、咲いたまま。」ころろを通じ合い、ネットワークを広げて
いきましょ! 気軽に連絡してください。

⑧千葉県支部 連絡先 石井 康雄

TEL : 090-3472-3788, 047-438-9380 E-mail : ishaso.fuki@gmail.com
千葉県では、君達の先輩が大勢がんばっています。そこで、皆さん
の力、ネットワークが必要です。加入をお待ちしています。

⑨神奈川県支部 連絡先 原 英喜

TEL : 090-9800-5831 E-mail : oyo5.hhara@gmail.com
生きる学び続けた日々、これからは社会に通ずる人として歩む道に
なります。「一日一生」を心して優しく逞しくね。

⑩山梨県支部 連絡先 鮎澤 譲

TEL : 080-1217-1364 E-mail : yayuzawa@outlook.jp
会員の輪をさらに広げ、楽しく集いたいと思っています。気軽に連
絡くださいね!

⑪長野県支部 連絡先 新海 健一郎

TEL : 090-8329-3346 E-mail : jkmcm472@gmail.com
あんなー、東京学芸大学は自分を一回り成長させてくれた生みの親
だら、有志集まりまーい、楽しいよ。

⑫新潟県支部 連絡先 玉木 浩

TEL : 090-9741-7520 E-mail : h01tamaki@yahoo.co.jp
新潟は、おめさん方を待ってる。～越後に輝く獅子の星座のもと、
集い、語り、絆を深めよう～

⑬富山県支部「獅子の会」連絡先 草野 剛

TEL : 090-4681-1079 E-mail : kusano-tsuyoshi@kamiichi.ed.jp
富山では280人以上の方ががんばるとるよ。
富山に戻るときには連絡しられ。まっとうちゃ。

⑭石川県支部 連絡先 諸江 真美

TEL : 090-8093-7584 E-mail : m-moroe@kanazawa-city.ed.jp
「ふるさと石川」は、あなたを待っています! みんなの力で石川の
魅力を一層輝かせましょ!

⑮福井県支部 連絡先 小林 弥寿夫

TEL : 090-8704-7562 E-mail : y-koba2020@lime.plala.or.jp
北陸新幹線、敦賀まで延伸! 東京から一本で帰省できるよう
なったのお、みんな待っているぞ

⑯静岡県支部 連絡先 大石 茂生

TEL : 090-2617-7616 E-mail : shigeo-yasuko02@za.tnc.ne.jp
ふじのくに静岡の辞職会はOB、OG、現役の会員80名余の同窓会
です。私たちと一緒に、仲良く、楽しくやりましょ。

⑰兵庫県支部 連絡先 里 昭憲

TEL : 090-5654-3024 E-mail : kurosan19@gmail.com
ご卒業おめでとう!! 予測不可能な時代とはいえ、新しい力を期待
して、たくさんの仲間がみなさんを待ってますよー

⑱鳥取県支部 連絡先 石名 勝実

TEL : 090-8605-8455 E-mail : gakugei.tottori31@gmail.com
県人会発足から34年。鬼太郎、コナン、ジローが、あなたの帰りを待っ
とります。まずはご連絡ください。

⑲島根県支部 連絡先 玉林 尚之

TEL : 090-4579-0034 E-mail : tamarin8511@gmail.com
出雲の社、石見の山と川、ふるさと島根は若い力を待っちゃよーよ。
帰って来んさったら連絡ごいてね。

⑳岡山県支部 連絡先 幸相 裕一 (さいしょう ひろかず)

TEL : 090-3746-8807 E-mail : hirokazusai@icloud.com
晴れの国岡山で待つとるけーなー! 帰ってきたら連絡してーよー。
美味しい肉や魚や野菜や果物をみーんなで、食べよーやー。
楽しみにしてるで。

㉑広島県支部 連絡先 田中 信也

TEL : 090-4806-7177 E-mail : s_tanaka@hiroshimaymca.org
広島に戻ったときはぜひ連絡を。
個性豊かな先輩たちがお待ちしています。

㉒香川県支部 連絡先 原 彪 (はら たけし)

TEL : 090-8699-3434 E-mail : st-hara1128@ma.pikara.ne.jp
卒業するみなさん、香川に帰ってみんなで住みやすい故郷をつくり
ましょ。毎年学芸大同窓生の会を開いています。みなさんの参加
お待ちしております。

㉓高知県支部 連絡先 中山 泰志

TEL : 090-4976-9220 E-mail : k_kobun4769@docomo.ne.jp
高知県出身者はもちろんのこと、高知県で働いてみたい方、是非連
絡をください。みなさんを学大卒業生一同お待ちしております。

㉔佐賀県支部 連絡先 小松原 修

TEL : 090-1089-8832 E-mail : samukomatsubara@yahoo.co.jp
教育に携わる卒業生とマスコミに携わる卒業生でがばい調和がとれ
ています。パルーンに乗って同窓会してます!

㉕熊本県支部 連絡先 藤田 まり子

TEL : 090-2503-9982 E-mail : fujimari5512@gmail.com
阿蘇に負けんパワーと、天草の海のごて綺麗な心で、熊本の学校を
元気にすつためにがんばるとるばい!

㉖大分県支部 連絡先 瀬口 卓士

TEL : 090-9070-2962 E-mail : seguchi-takuji@oen.ed.jp
「田舎暮らし日本一」を目指して、しらしんけん大分を元気にしよるで。
わーけえ先輩もだーね増えて、みんなで40名こえたんで、心も体もあつ
たまる温泉県にもどつたら、いつでん連絡してな。待つちよるけん。

㉗宮崎県支部 連絡先 村中田 博

E-mail : hm110629@gmail.com
皆さんの活躍が楽しみじゃー 300名程の名簿ができちよるよー
日本のひなた『宮崎』で待つちよるー!

㉘鹿児島県支部 連絡先 雲井 未歎

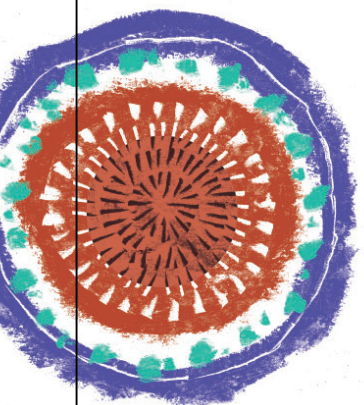
TEL : 099-285-7766 E-mail : kumoi@edu.kagoshima-u.ac.jp
鹿児島では、桜島が毎日噴煙を上げています。その力強い始動は鹿
児島の全ての同窓に届いているはず。支部の和も同じように広
がってほしいと願っています。

㉙韓国支部 連絡先 金範洙 (キボンズ)

TEL : 090-6106-0493 E-mail : bskim77jp@yahoo.co.jp
ポストコロナ時代を迎え、韓国文化・韓国語・教育研修を中心に様々な
教育活動を予定しています。韓国辞職のメンバーは教育関係者が中心と
なっています。韓国地域との国際交流を考える際はぜひご相談ください。

これまでに設立された辞職会の道県支部では、
皆さんからの連絡を待っています。





大河ドラマの撮影現場に身を置いて



善美写真

布施 絢子

私は現在、撮影業界の片隅で仕事をしている布施絢子と申します。

この度、『辟雍』に寄稿するという貴重な機会をいただきましたので、私の人生を振り返りながら学芸大学への感謝の意を表したいと思います。ご一読いただき、私のささやかな体験から「学芸大学らしさ」を感じ取っていただければ幸いです。

■学芸大学に入るまで

私の父はカメラマン、母は電通の記者でした。私は、祖父が開業した本郷の写真館で、取材現場で出会った二人の間に生まれました。幼い頃の写真館一階のスタジオではお正月、七五三、入園・入学、成人式などの撮影が一年中行われていて賑わっていたことを覚えています。祖父と祖母が暮らしていた奥のリビングの本棚には、母の『スクリーン』という映画雑誌がずらっと並んでいました。

私が10歳の時、両親が離婚し、母について家を出た私は肉体的にも精神的にも危機的な状況に陥り、小学5年生の頃には人生に絶望して人間不信に陥りました。救いを求めて毎日図書館通いをするようになり、河合隼雄さんの本やルソーの『エミール』、『ソフィーの世界』などの哲学書や教育書を読み漁りましたが、何も解決しませんでした。中学に入って学校の図書館で『スクリーン』を見つけると、ハリウッド俳優のインタビュー記事を好んで読むようになりました。異国の地で困難と闘いながらそれを乗り越えようとしている俳優の言葉に慰められたからです。

今になって当時を振り返ってみると、家庭環境が崩壊し、愛情の不足に悩んでいた私は、自分の存在意義さえ否定していたように思います。しかし、やがて自分と同じように辛い思いをしている子供たちを助きたいという気持ちが強くなり、その結果、東京学芸大学の門戸を叩いていました。

■二つの目標と恩師・友人

大学生になってから私は将来に向けて二つの目標を

設定しました。一つは、大変な苦勞をして私を大学まで行かせてくれた母に恩返しをすること。そしてもう一つは、会えなくなって久しい父はどんな人なのか、その人間性について知りたいということでした。どちらも家族に向けた目標でしたが、よくよく考えてみると同じような境遇にある子供たちを救う以前に、自分自身の問題が解決していなかったからです。私は、ヨーロッパが好きな母と渡欧して暮らすことを夢見て、学生時代にその準備をするべくハイデルベルク大学への交換留学生になることを希望しました。このドイツ留学が実現したおかげでいろいろな国の人たちと交流することができ、私の視野を格段に広げることができました。アジア研究教室の学生である私にこうした機会を与えていただいた学芸大学には本当に感謝しています。

また学芸大学では、入学時に渡された『図書館便り』の1ページ目に掲載されていた鷲山恭彦先生（先生は当時図書館長で、この後学芸大学の学長になられました）の文章に感銘を受けた私は、鷲山先生の欧米研究のゼミに参加させていただき、アジア研究では馬淵先生（先生は現辟雍会会長で、鷲山先生の学長時代に理事副学長として国際交流の仕事も担当されました）のゼミの行事などに参加しました。学芸大学時代に私が得た貴重な財産は、何人かの親しい友人ができたことと、こうした恩師に巡り合えたことです。

■撮影という世界へ

大学卒業後、私は凸版印刷で広告写真部門のフォトディレクターとして働き始めました。二つ目の目的とした父の職業について知るためです。この仕事は私の性にあって働くことがとても楽しくなり、父のことも



学芸大学の本部棟前で
右：鷲山先生、左：馬淵先生、中央左：秘書の上床さん



光る君の舞台セット



撮影準備中のウィーンオペラ座



撮影中のトム・クルーズさん

少し分かったような気がしました。その後、一念発起して30年ぶりに父に会いに行きました。はたして会ってみると、とても素敵な父親でした。この再会が私をようやく長い苦しみから解き放してくれました。

これを契機に、私はディレクターを辞めてカメラマンへの道を目指しました。つてを頼りに母を連れて向かったオーストリアのウィーンで、私たちは偶然Mission: Impossibleの撮影に出くわしました。オペラ座を借り切って行われていた大規模な撮影は豪華絢爛そのものでしたが、この経験が私を撮影現場に導いてくれるきっかけとなりました。やがて母の希望で日本に戻った私は、撮影監督協会に足を運び、映画やドラマ、CM撮影の現場にカメラマン助手として同行できるようになりました。最近では大河ドラマの現場にも参加させていただいております。『どうする家康』、『光る君へ』、『べらぼう』等々で、松本潤さん、吉高由里子さん、横浜流星さん、綾瀬はるかさんなど名だたる俳優さんたちとお仕事をする日々が自分に訪れるとは夢にも思いませんでした。1シーン毎に丁寧に監督とやりとりされる松本さん、横浜さんのお姿を見るにつけ、また連日大変な撮影の中でスタッフに気さくに話しかけたり、おちゃめなことをしたりしてみんなを楽しませてくださる吉高さんや渡辺さんのお人柄に触れるたびに、一秒一秒が宝物のように感じられます。その上、一流のスタッフの方々と一緒にできるこのような日々は、カメラや機材の重さに身体が悲鳴を上げていても、私に

としては掛け替えのないものになっています。

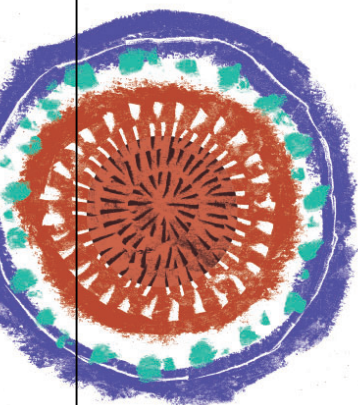
多くの方々にお世話になりながら希望する道を歩むことができるようになった今、そうした方々への感謝の気持ちを忘れることなく、カメラマンとして独り立ちできるよう頑張りたいと思います。そして、私のささやかな仕事に困難を抱えた人々の何がしかの支えになる日が来ることを切に願っています。

2005（平成17）年卒業 K類アジア研究



私の作品

一期一会と東京学芸大学



成城学園初等学校 校長

高橋 丈夫

東京学芸大学評議会の理事・広報部長をされている小澤一郎先生から電話をいただいたのはいつのことだったでしょうか。事務の方から「外務省のオザワ先生という方からお電話です」と連絡を受けた時に最初に思ったのは、「はて、外務省と何かつながりがあったであろうか?」というものでした。違和感をもちつつ電話口に出てみると、懐かしい、ちょっとハスキーで高めの声が「高橋君、久しぶりです。覚えていますか? 小澤ですが…」と。声を聞いた瞬間、一瞬にして東京学芸大学附属高等学校大泉校舎でお見かけした時の姿や、附属小金井小学校教員時代に授業を参観していただいた時のこと、私の担任していた6年生のクラスで特別授業をしていただいた時のこと、授業を参観してくださった時にいただいた「高橋君、子ども達は先生が思っている以上に先生の身振りや手振りをよく見ているよ。」というアドバイス等が、当時の状況と一緒にあふれ出てきました。そこからはとんとん拍子でどんどん話が進み、評議会のOB訪問先事業の一つとして、成城学園初等学校に学生のみなさんと足を運んでいただくことになりました。

私が現在勤務している成城学園初等学校は、文部次

官や東北帝国大学総長、京都帝国大学総長などを歴任された澤柳政太郎先生が、当時の公立学校の教育に限界を感じ、退官後に「本当の教育」を目指して1917年に創設した学校に端を発する学校で、2025年で創立108年になる世田谷区にある私立学校です。私立学校には、どの学校にも創立以来大切にしている創設理念があります。成城学園初等学校は「個性尊重の教育 附 能率の高い教育」、「自然と親しむ教育 附 剛健不撓の意思の教育」、「心情の教育 附 鑑賞の教育」、「科学的研究を基とする教育」を、4つの希望理想として大切にしています。子ども達や先生の個性が尊重され、互いの個性が尊重されつつぶつかり合う中で磨かれていく、そのような学校です。先生方も子ども達も、校長の私でさえも互いをあだ名で呼び合う、子どもと先生との距離がとても近く、自由な雰囲気のある学校でもあります。私は、その初等学校に着任して今年で10年目を迎えました。東京学芸大学名誉教授である杉山吉茂先生のゼミの先輩であり、学芸大学の大先輩でもある杉田博之元副校長先生に声をかけていただいたのがきっかけでお世話になることになったのです。「定年まで担任ができる」、その一言にとっても魅力を感じ



6年生 研究授業の様子(数学 文字の導入)



広場から見た校舎

じ、当時勤めていた東京学芸大学附属小金井小学校からの異動を決めたのですが、なぜか今は校長職にあります。

校長職を務めつつ授業をしながら最近とみに感じることがあります。それが出会い（縁）の大切さと、その時の心構えについてです。「一期一会」という言葉があります。四字熟語として誰もが一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。私は、出会いや縁を大切に、くらの意味でこの言葉をとらえていたのですが、広辞苑をひいたり、webで調べてみたりすると、もう少し詳しい意味があることが分かりました。広辞苑には「(茶会の心得から)生涯にただ一度まみえること。一生に一度限りであること。」とありました。webには、安土桃山時代の茶人で千利休の弟子として活躍した山上宗二の著『山上宗二記一茶湯者覚悟十体』にある「一期に一度の会」から出た言葉らしいということが載っていました。茶会は、それぞれそのとき一度かぎりのものであるのです、どの茶会にも誠意をもって臨むべきであるという茶道の心得から来ているとありました。

定年を2年後に控えた今、ここまでの自分を振り返ってみると、学部生時代や大学院生時代、附属小金井小学校在任時、そして成城学園初等学校で出会った多くの方との縁に導かれ、生かされている自分に気づきます。

学部生時代、麻雀やパチンコ、アルバイトに精を出し学業と真面目に向き合わなかった私は、中高数学の教員免許を取得するために半期留年することになりました。その時に相談にのってくださったのが、前出の杉山吉茂先生です。留年している半年間も含め、杉山先生には講義の聴講をさせていただいたり、講演や先生が講師として行かれる授業研究会に連れて行って



創立者 澤柳政太郎先生

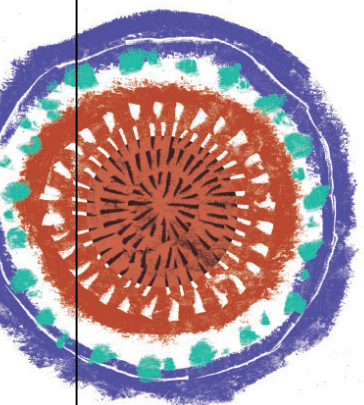
ただいたりしました。そして、そのご縁もあり、その後学芸大学の修士課程に進学した私は、今も様々お世話になっている、多くの先輩方や研究仲間との出会いを得ます。また、先生の勉強会や大学院での出会いがきっかけで、附属小学校で勤務する機会をいただいたり、成城学園初等学校で勤務する機会に恵まれたりしているのです。このように振り返ってみると、学芸大学は、私にとって縁を生み出し、縁を紡ぎ続けてくれている大切な場所であることが分かります。私がそうであったように、学芸大学が紡ぐ良縁を更に広げていくことが出来るよう、一期一会を大切に努力していきたいと思います。機会がありましたら、是非一度、初等学校に足をお運びください。

1997(平成9)年修了
大学院 教育学研究科数学教育専攻 修士課程



観察の森から見た校舎

一流の教育は一流の研究から



横須賀市自然・人文博物館 学芸員（地球科学）

柴田 健一郎

1. 成果に基づいた教育

「一流の教育は一流の研究から」という本稿のタイトルは、私の恩師である松川正樹先生（現東京学芸大学名誉教授）の言葉です。基礎研究を自ら実践した研究者こそ、その研究の意義や面白さを最も深く理解しており、そうした研究者自身が自分の研究成果を活かして行う教育こそが「一流」である、という意味が込められています。この考え方は、私が博物館学芸員として仕事をする上で、根幹となる指針となっています。

2. 松川先生との出会い

私が東京学芸大学大学院の修士課程に進学したのは、松川先生の研究室で研究をしたいと思ったからでした。幼い頃から恐竜化石や博物館に憧れを抱いていた私は、千葉大学理学部で地球科学を学びつつ、学芸員資格を取得するために必要な単位を集めていました。そのような中で、松川先生の著書『恐竜ハイウエー』に出会い、学芸大学には大変魅力的な研究を行っている先生がいることを知りました。そして、学芸大学大学院に進学することを決意しました。

3. 学芸大学での2年間

修士課程では松川先生のご指導の下、米国ユタ州とニューメキシコ州の足跡化石産地を題材とする研究に取り組み、恐竜が出現した後期三畳紀の陸上古生態系を食物網とエネルギー流で復元するというテーマで修士論文をまとめることができました。アメリカで初めて見た地層や化石は、質・量ともに素晴らしく、強い感動を覚えながら調査研究を進めました。

松川研究室では、基礎研究に基づいた教材開発も行われていました。「一流の教育は一流の研究から」という言葉を松川先生から伺ったのも、ちょうどこの頃だったと思います。実を言うと、私は当初、教育学や教材化の研究にはあまり興味を持っていませんでした。しかし、このような学芸大学での経験が、将来、学芸員としての業務に大きく役立つとは、その当時は全く予想していませんでした。「教育は忘れても残るもの」の

名言通りでした。

4. 学芸員としてのスタート

修士課程修了後、私は千葉大学大学院の後期博士課程で堆積地質学の研究を続けましたが、在学中に横須賀市自然・人文博物館の地球科学担当学芸員として採用されました。子供の頃からの夢がかない、学芸員として仕事できる喜びは大変大きいものでした。しかし、博士課程を中退し、学位を持たないまま博物館で調査研究を続けることになりました。なかなか学位論文をまとめることができませんでしたが、採用から16年と



米国ニューメキシコ州での足跡化石産地の調査。左から1人目が筆者、3人目が松川先生。2003年。



博物館での地層観察会。2018年。

いう歳月を経て、ようやく博士（理学）の学位を取得し、研究者としてのスタートラインに立つことができました。

5. 研究に基づいた博物館の教育普及活動

私が博物館で展示やイベントを企画する際、常に意識しているのは「一流の教育は一流の研究から」です。2021年には、特別展示「足跡化石から探る太古の世界」を開催しました。この展示は、学芸大学在学時から継続してきた足跡化石の研究を基に構成したもので、発掘体験やパズルなど、研究の追体験ができる体験・参加型の展示も取り入れました。当館ならではのオリジナル리티あふれる内容へとまとめることができたと自負しています。

また、私は三浦半島をはじめ、福島県や岩手県、米国ユタ州などで地質調査を行ってきました。そうした研究成果を活かし、新たな展示物の開発にも取り組んでいます。これまで、複数の視点から撮影した写真をもとに地層を3Dデジタル化することにより、3Dデジタル地層モデルを制作・蓄積してきました。これらを活用し、来館者が地層を立体的に把握し、地層の形成過程や過去の環境を読み取ることができるような、新



特別展示「足跡化石から探る太古の世界」の展示解説。2021年。



「化石レプリカづくり」のイベントで参加者に指導する博物館実習生。



「広尾地学研究会」の野外巡検。主に学芸大卒業生から構成される地質学の研究会。2025年。

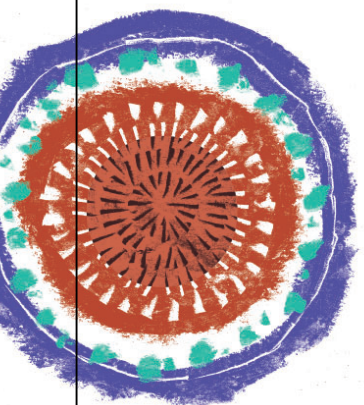
しい展示物を開発中です。一般的に、博物館の見学者は解説を読むだけで満足してしまいがちで、自ら考えたり探究したりする機会が限られている場合が多く見られます。この3Dデジタル地層モデルを用いた展示は、そうした課題の解決に寄与できると考えています。

博物館では学芸員資格取得を目指す学生のための博物館実習を受け入れています。私は「化石レプリカづくり」のイベントにおいて、参加者への指導を実習生に担当させています。化石を専門としない実習生がほとんどですが、「化石について十分に調べてから指導すること」、そして「一流の教育は一流の研究から」という姿勢を必ず伝えていきます。その結果、教育に研究を活かす重要性を実感して実習ノートに記す学生も見受けられ、こうした方針を軸に、今後も社会で活躍できる人材が増えていくことを期待しています。

6. おわりに

学芸大学では、基礎研究の重要性と、その成果を教育へと結びつけることの大切さを学びました。松川先生には、現在も共同研究の機会をいただき、変わらずご指導いただいています。また、在学中に築いた友人や後輩とのつながりも、私にとってかけがえのない財産です。これらの学芸大学で得た経験や人とのご縁を活かし、今後も博物館の教育活動に力を尽くしていきたいと考えています。また、横須賀市自然・人文博物館では現在、大規模な展示リニューアル計画を進めています。自分自身の基礎研究の成果に基づき、来館者が主体的に探究できるオリジナルの展示内容を作り上げたいと考えています。

2004（平16）年3月修了 大学院修士課程理科教育



文明の十字路 「ウズベキスタン」より



元東京学芸大学学教育研究支援部
小学校英語教育担当課長

松尾 敏子

私は、行政管理庁（現在 総務省）から始まり、政府の役所で約9年間働きました。当時の職場には子どもを育てながら働く女性が少なく、なかなか働きにくい面がありました。その後、大学勤務を希望して東京学芸大学へ出向することになりましたが、学芸大学は子どもを育てながら働く女性が多く、とても働きやすい職場でした。居心地がよくて結局約29年間学芸大学に勤務しましたが、2016年に自己都合で早期退職をしました。学芸大学ではおよそ3年位で人事異動があり、幅広い仕事をすることができました。異動のたびに新しい人との繋がりができ、互いに助け合いながら仕事を進めるといふ学芸大学の職場の気風は私にとって貴重なものでした。現在、私はウズベキスタン国立世界言語大学の日本語教師として働いていますが、こうした仕事に対する姿勢を大切にしていきたいと思っています。

私は2019年から仕事でエジプトに赴任した夫とともにカイロで3年間過ごしました。私が日本語教師になろうとしたきっかけは、その時に出会ったJICA青年海外協力隊の日本語教師の方々や国際交流基金カイロ日本文化センターの日本語教師の方々の活動に感銘したからです。それ以来私は、いつか日本文化を外国人に伝えたり、日本語を学ぼうとする人びとを支援したりしたいと考えるようになり、それが私の次の人生目標になりました。

エジプトから日本に帰国した時には私は60歳を過ぎ

ていましたが、日本語教師の資格取得を目指して1年間専門学校へ通い、若い人たちといっしょに勉強しました。途中「コロナ禍」に遭遇して学校の授業にも影響が出ましたが、なんとか日本語教師の資格を取ることができました。その後、地域に住む外国人に日本語を教える国分寺市の国際協会に日本語教室があることを知り、そこで2年間日本語教育の仕事に従事した後、都内の日本語学校の教師になりました。日本語学校で働くようになってから、日本語教師養成学校時代の知人がウズベキスタンの大学で働いていることを知りました。連絡を取って、ウズベキスタンまで観光を兼ねて日本語教育のボランティアに出かけたのが2025年3月のことです。それがご縁で2025年9月からウズベキスタン世界言語大学で正式に教員として採用されることになりました。

ウズベキスタン国立世界言語大学は、同国で唯一の言語に関する専門大学で、学生数は約23,000人にのぼり、20もの言語を学ぶことができる大学です。昼クラスと夜クラスの2部制で、私が所属している東洋言語学部では、韓国語、中国語、日本語の3言語を学ぶことができます。日本語学科には現在約600名の学生が在籍しています。

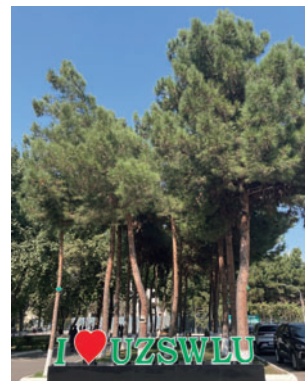
海外では文化の違いで驚くことがたくさんありますが、この大学で驚いたことは、シラバス・カリキュラムと実際の授業内容に相違があり、また時間割は事前には決まっておらず、1週間ごとに変わることです。連絡



ウズベキスタン世界言語大学本部棟



2年昼書道



キャンパス内

手段は、すべて Telegram というアプリで行っています。大学の学内 LAN がないため、セキュリティ上の問題があることと、情報が整理されていないため、後で関連情報を探し出すのに苦労しています。また急な決定事項が多く、仕事に支障をきたすことも多々あります。

日本語の授業は、「みんなの日本語」からスタートしますが、一般的な日本語科目（文法、聴解、読解、作文、漢字など）で使用する本は日本と同じです。その他専門科目（翻訳、同時通訳、日本文学、教授法、日本事情、文体論ほか）の授業があります。私は、昼2年の「漢字・作文」、夜3年「翻訳」「教授法」、夜4年の「日本語基礎理論」「日本語科目」で1コマ80分、週13コマの授業を担当しています。ほとんどの日本人教師が10コマ以上の授業を担当しています。1週間ごとに時間割が変わる週末には次の週の時間割が届きます。時には月曜日の朝に変更の連絡があり、常に携帯電話の Telegram から目が離せません。

ウズベキスタンの若者は、小学校の時から英語、ロシア語を学んでいるので、複数の言語ができます。その上で日本語を学んでいますので日本とは違います。真面目に学ぶ学生もいればそうでない学生ももちろんいますが、そのような学生にはどのように工夫したら日本語を好きになるのか、興味を持ってくれるのか、といつも悩みながら授業準備をしています。この国では入学試験の結果によって、学科・専攻が決められるので、日本語学科を希望していない学生も振り分けられることがあります。

昼クラスの2年生の授業では「漢字・作文」を教えています。みんな日本人の先生に目を輝かせ、積極的に発言したり、日本のことを興味深く聞いたりしてくれます。そのため当然授業準備にも力が入ります。

私はウズベク語が全くできないのですが、スマホの翻訳アプリを駆使しながらコミュニケーションをとっています。ウズベク語や今も話者の多いロシア語に翻訳できるので、便利なスマホに頼りすぎて言葉を覚えなくなるのがデメリットでしょうか。

生活面のお話しをしますと、まず食事ですが、ウズベク料理はとてもおいしいです。お米料理のプロフ、うどんに似たラグマン、焼き鳥のようなシャシリク。大きなマントウ（肉まん、餃子に似ています）はサ



ウズベキスタン世界言語大学東洋言語学部棟



上：2年昼ウズベククラス

下：2年昼ロシア語クラス

ワークリムで食べます。また、ウズベキスタンは旧ソ連に属した国であったため、ボルシチなどもとてもおいしいです。パンもおいしいので、つい食べすぎてしまいますが、少し塩分が多いので食べすぎに注意しなければなりません。

住まいは、大学のゲストハウスで本部キャンパス内にあります。ただし、私の教えている東洋言語学部は別のキャンパスにありますので、バスやタクシーを使用していますが、バスに乗るとそれなりの年齢だとわかり席を譲ってくれます。地下鉄に乗っても、この国の男性や若者はすぐに席を譲ってくれます。女性と高齢者を優先する社会は気持ちのいいものです。

買い物は近くのスーパーやバザール（市場）へ行きます。市内に大きなバザールがたくさんあり、洋服から土産物、寝具、野菜、果物、肉、魚、電気製品など何でもそろっています。

ウズベキスタンには青の都といわれるサマルカンドやブハラ、ヒヴァなど、有名な世界遺産がいくつもあります。観光でも近年人気が出てきて、日本からの団体ツアーの人もよく見かけます。またウズベキスタンの国語となっているウズベク語にはイスラム教との関係からアラビア語系の語彙がたくさん含まれているほか、ペルシャ語系のタジク語を話す人たちやロシア帝国・ソ連の時代が長く続いたこともあってロシア語話者もたくさんいます。その他、スターリン時代に旧ソ連の沿海州から強制移住させられた韓国・朝鮮系の人々（この人びとは韓国語ではなくロシア語を話す人が多いのが特徴です。）もいて、まさに文明の十字路と呼ぶにふさわしい国になっています。変わりつつある日本社会を見つめなおすためにも、この多文化社会の国へ是非一度足をお運びください。

これからの日本はどうか？ — 異常気象の未来予測



三重大学大学院 生物資源学研究所
地球環境学講座 教授

立花 義裕

「羽鳥慎一モーニングショー」をはじめニュース番組等に多数出演。わかりやすい解説で定評がある。札幌南高校卒。2008年より現職。2024年東海テレビ文化賞受賞。2025年の新語・流行語大賞で「二季」がトップテン受賞。日本気象学会理事、日本雪水学会理事。一般向けの著書「異常気象の未来予測」(ポプラ新書2025年発行)。

● 「二季化」する日本

2025年の「新語・流行語大賞」のトップテンに「二季」が選ばれました。地球温暖化で、四季の移ろいが崩れ、長い夏と冬のみの国になりつつあります。それを、人々が痛切に感じた年で、二季が多くの人々の心に刺さったことが選ばれた理由だと思います。

日本は、四季の変化が鮮明で、その移ろいを愛でる文化が千年以上も根付いています。美しい日本の四季と、それにシンクロする固有の文化と風土があります。それが「二季」になりつつあるのです。「新語・流行語大賞」には「緊急銃猟ノクマ被害」や「古古古米」も選ばれました。里に出る熊が増えている一因は、猛暑によって山の幸が減少したからです。米価格の高騰も、数年続く猛暑により米の不作が続き、需給バランスが崩れたことが一因です。人類が余剰に排出している二酸化炭素による地球温暖化が、我々の生活を脅かしているのです。だから、私たちは自分で自分の首を締めているようなものです。それに気がつかさせられた1年でした。

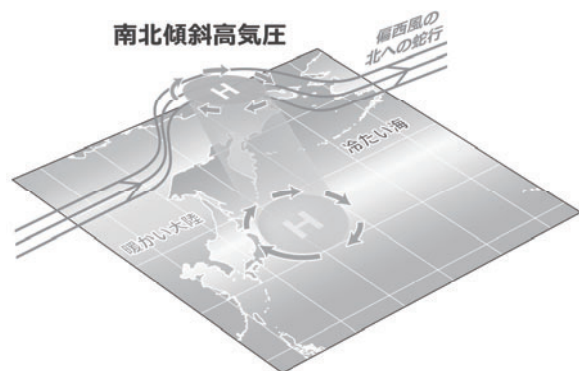


図1 近年の日本周辺の夏の気の流れと高気圧パターン。Amano Tachibana and Ando (2023), Journal of Climate の図を日本語化。

● 高気圧と海の熱と黒潮が生んだ「異常な夏」

2025年の夏が、なぜこれほど暑かったのでしょうか。その要因は、日本列島を覆った高気圧にあります(図1)。高気圧が日本列島をすっぽり包み込んだことが、例年がない暑さの直接的な原因でした。

もう一つの猛暑の原因は「海」です。図2は2025年7月の海面温度を示したものですが、日本周辺の海はまるで熱湯のように暖まっていました。場所によっては平年より5度も高い海域もありました。熱せられた海から立ち上る熱気が空気を温め、その温まった空気が日本列島に流れ込む。つまり、海と空の両方から熱を受けたのが、今年のとんでもない猛暑を生み出した。

図3が示すように、日本周辺の7月の海面温度は年々上昇しており、今年は突出して高い水準でした。熱容量の大きい水は一度温まると冷めにくく、風呂の湯と同じように高温状態が長く続きます。したがって、7月に高かった海水温は9月、10月に入っても下がらず、秋になっても暑さを長引かせました。加えて、海の上の空気は湿っており、水蒸気を多く含んだ空気が陸地に流れ込むこと

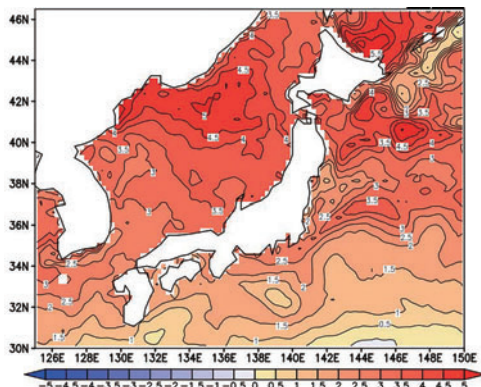


図2 2025年7月の1ヶ月平均の日本周辺の海面水温の平年からの差。気象庁データに基づき、筆者が計算。

で蒸し暑さが加わりました。これが、長引く猛暑の直接的な要因です。

地球温暖化に伴い海面水温が上昇しています。中でも日本周辺の海面水温の上昇率は世界平均の3倍も早いのです。これは世界一です。その理由は、日本が世界一広い太平洋の西端に位置しているからです。日本列島には、世界でも最も速く海流の一つである黒潮がぶつかっています。黒潮の源流域は世界一高温の海のインドネシア北の沖合の西部熱帯太平洋です。赤道付近から北上する熱くて速い海流が、冷める間もなく日本にぶつかっています。黒潮は、赤道付近の大量の「熱水」を日本に運んでいるのです。温暖化する世界一熱いインドネシア沖の海の影響を日本は直接受けるのです。インドネシア沖の海が世界で一番高温となる理由は、熱帯地方では東から西に向かう貿易風が吹いているからです。熱帯太平洋に広がる高温の海水が、貿易風によって西へ西へと吹き寄せられ、インドネシア沖にそれら熱水が貯まるのです。世界一の熱水の貯蔵庫から、日本に向けて熱水が直送されているのです。それが黒潮です。

●偏西風の蛇行がもたらす「終わらない暑さ」

なぜ日本付近は高気圧に覆われやすいのでしょうか。その要因は、地球温暖化と深く関わっています。

図4は近年の夏の世界の高温のパターンの模式図ですが、日本付近を大きく覆う高温の範囲が見取れます。近年、日本だけでなくヨーロッパやアメリカでも同様に、異常高温に覆われる傾向が強まっています。

この背景には「偏西風の蛇行」があります。偏西風は北極の冷たい空気と赤道の暖かい空気の境目に沿って吹く強い西風で、通常は小さく蛇行して流れます。しかし近年、この偏西風が大きく蛇行するようになりました。日本やヨーロッパ付近では偏西風が北へ押し上げられる形となり、その結果、南からの暖かい空気が流れ込み、高気圧が発達して熱を閉じ込めてしまう。図の「暑」と記載されている部分が、時計回りのカーブを描いて風が吹くので、高気圧になるのです。そしてこの蛇行が、地

球温暖化によって引き起こされているのです。

ではなぜ、温暖化で偏西風が蛇行するのでしょうか。偏西風は速度が速いと直線的に流れ、遅くなると蛇行します。近年、偏西風のスピードが遅くなっています。それは、北極と赤道の温度差が縮まっているからです。北極が急速に暖まる一方、赤道の上昇は緩やか。温度差が小さくなれば風の勢いも弱まり、蛇行が激しさを増します。まるで急流が直線に流れ、ゆるやかな川が蛇行するようなものです。

北極の温暖化は特に深刻です。氷や雪が溶けることで白い反射面が減り、黒い海水や地面が太陽光を吸収しやすくなります。これがさらに温暖化を加速させる。「悪循環」です。一方、赤道では温暖化が進むと水蒸気と雲が増え、太陽光の反射によって気温上昇が抑えられます。つまり、北極が加速的に温暖化し、赤道が抑制的に働く結果、温度差が縮まり、偏西風が弱まり蛇行するというわけです。

●温暖化が日本を狙う地理的要因

では、なぜ偏西風はいつも日本付近で北に蛇行するのでしょうか。その理由は、陸と海の温まり方の違いにあります。陸地は海よりも温まりやすく、特に日本の西にあるユーラシア大陸では温暖化が急速に進んでいます。大陸で生まれた熱い空気が日本列島付近に流れ込み、偏西風はその熱気を避けるように北に押し上げられます。その結果、日本は高気圧に覆われやすくなるのです。ユーラシア大陸は世界一大きな大陸です。高温化著しいユーラシア大陸の東に位置する日本は、偏西風の下流に位置しますので、大陸全体で蓄積された熱が日本に流れ込むのです。

こうして北への蛇行が続くことで晴天が続き、暑さが蓄積し、海水温の上昇がさらに拍車をかけます。結果として、猛暑が9月・10月までも続く。日本列島はまさに、偏西風の北への蛇行が生む「終わらない暑さ」の最前線にあるのです。

日本は世界最大の大陸の東岸に位置し、世界最大の大陸

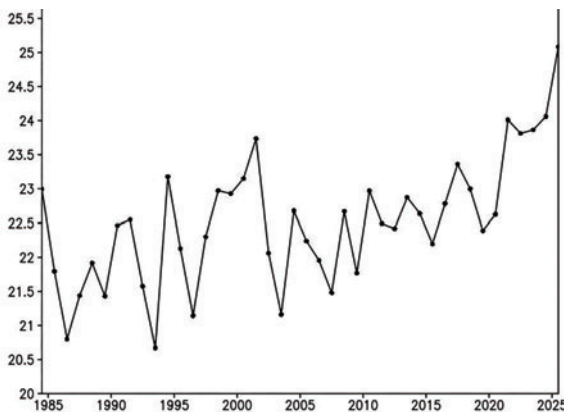


図3 図2の範囲を平均した7月の1ヶ月平均の海面水温の経年変化

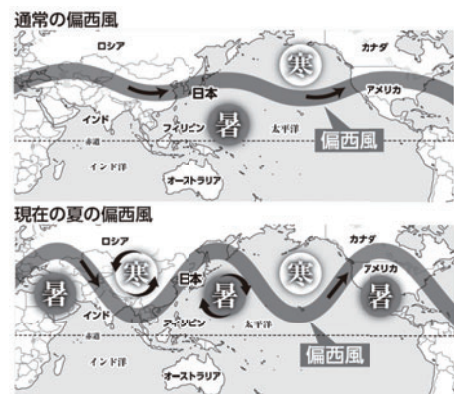


図4 (上) これまでの夏の典型的な偏西風パターン。(下) 近年の夏の偏西風パターン。「異常気象の未来予測」(立花義裕著、ポプラ新書、2025年より引用)

洋である太平洋の西岸に位置する。このような日本の地理的位置が、温暖化が日本を狙い撃ちする理由なのです。

●温暖化をもたらす極端気象の連鎖

こうした高温暖状態は、豪雨を引き起こす要因にもなっています。2025年は東京をはじめ全国各地で猛烈な雨が降り、特に北海道では史上初めて線状降水帯が発生しました。これまで九州地方で多かった現象が、北の大地でも起きたのです。

豪雨激増の根本にあるのが、海水面温度の上昇です。海面が暖まると、海からの蒸発が促進され、大気中の水蒸気量が増加します。水蒸気は上空で冷やされて雲になりますが、近年はその雲の水分量が極端に増え、ひとたび低気圧や前線が通過すると、同じ気圧配置でも雨量が格段に増えます。つまり、温暖化によって「雲のパワー」そのものが上がっているということです。水蒸気が多いほど雨は激しくなります。近年の豪雨の増加はまぎれもなく海面水温の上昇が主因であり、その背景にあるのが地球温暖化です。温暖化 → 海水面温度上昇 → 水蒸気増加 → 豪雨増加の連鎖が進行しています。

●冬も激しさを増す

冬はどうなるのでしょうか。「冬が暖かくなるならいいじゃないか」と言われることがありますが、実際には、冬は穏やかになるのではなく、むしろ極端な天候が増えています。

図5は、近年の冬に見られる典型的な偏西風の蛇行パターンを示しています。冬の偏西風は、アジア（日本付近）で南へ下がり、アラスカ付近で北へ上がり、再びアメリカ側で南に下がる。そんな波を描きます。寒気が日本とアメリカの両方に流れ込みやすい構造で、夏とは正反対です。このため冬は、日本でもアメリカでも寒波が発生しやすくなっています。

では、なぜ冬は夏と逆のパターンになるのでしょうか。それは、北極の氷が急速に減少していることが影響しています。氷が溶けて暖気が北極圏に流れ込むと、その分、冷たい空気が両脇、つまり日本や北米方面へ押し出されます。これが冬に寒波が発生するメカニズムです。

したがって、地球温暖化の時代でも寒波はなくならず、むしろ強まる傾向にあります。平均気温は上昇しているのに、局地的には厳しい寒波が頻発する。こうした“寒暖の変化の激しさ”によって、雪害はむしろ増えています。

もう一つの要因は、海水面温度の上昇です。海が暖かいと水蒸気が大量に発生し、寒気が流れ込むとその湿った空気が冷やされ、雨ではなく雪になります。つまり、近年の豪雪は地球温暖化の副作用なのです。猛暑が豪雪をもたらすのです。

近年の雪の降り方は昔と大きく変わりました。短時間に集中的に降る。たとえば2025年2月、北海道・帯広

では6時間で120センチという観測史上初の豪雪を記録しました。かつて1～2日かけて降っていた雪が、今はわずか数時間で積もってしまう。極端な現象が頻発しています。

つまり、温暖化時代の冬は「豪雪の冬」です。そして夏は「猛暑と豪雨の夏」。晴れば猛暑、降れば豪雨。冬は豪雪、夏は猛暑。春と秋は短い。私たちは今、「二季化」の時代に生きているのです。

●経済と脱炭素、両立の時代へ

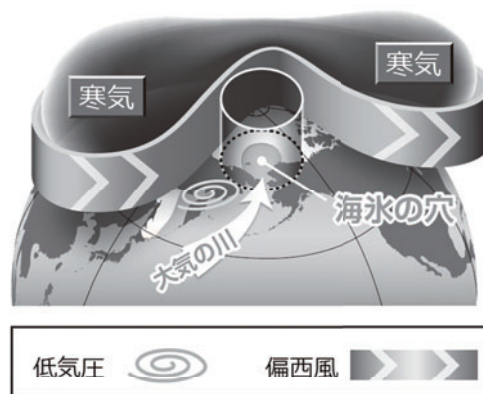
2024年、日本では2千人以上が熱中症で命を落としました。この数は毎年増え続けています。これはもはや「健康の問題」です。

地球の平均気温はすでに100年前より約1.5度近く上昇しています。もしこの上昇がさらに進めば、その時点からCO2を減らしても気温は下がりません。1.5～2℃を超えていない今ならまだ間に合います。これが最後のチャンス、すなわちティッピング・ポイント（転換点）です。私たちはまさにその瀬戸際に立っているのです。

世界中でも異常気象が頻発し、輸入農産物の価格も上昇しています。食料、エネルギー、災害の全てがつながっています。CO2を減らすことは、私たちの生活を守るためでもあるのです。

「脱炭素より経済を優先すべきだ」という声もあります。確かに脱炭素は短期的にはコストがかかります。しかし、長期的に見れば脱炭素を進めるほうが経済的にも得策です。温暖化が進み、災害や農業被害が増えれば、復旧費用やエネルギーコストは何倍にも膨れ上がり、それでいちばん困るのは、私たち自身なのです。

●未来を守る最良の投資は地学教育



アラスカ沖の北極海の海水減少に伴う北極寒気分裂の模式図。海水の穴は、北極海の海水が激減したことによって、北極海の海氷原に穴が開いたような状態を示す。水がなくなったために、北極上空の気温が上がる。気温上昇域が海水の穴の上に描かれている筒状の部分(円柱)である。円柱部分が極端に暖かくなるため、もともと北極にあった寒気が夏アジアと北米方向に分裂する。偏西風はアラスカを大きく北に迂回するように流れ、大きく蛇行する。Tachibana et al. (2019)をもとに作成。

図5 近年の日本周辺の冬の偏西風の流れのパターン。Tachibana 他 (2019), Scientific Reports の図を日本語化。

異常気象の頻発といった問題をどれほど若い世代が学んでいるでしょうか。残念ながら、日本ではほとんど学ばれていないのが実情です。

かつては文系・理系を問わず、物理・化学・生物・地学の4分野を一通り学ぶのが当たり前でした。しかし今は違います。気象や気候変動の仕組みを理解するために欠かせないのが「地学」という分野ですが、高校教科の「地学」または「地学基礎」を教えている学校は全国的に激減しています。そのため、日本の若者の多くは地球の仕組みを体系的に学ばないまま大人になっています。

一方、ヨーロッパは全く異なります。イタリアでは気候変動の授業が必修科目として導入され、ヨーロッパの若者たちは「異常気象がなぜ起こるのか」を当たり前のよう学校で学んでいます。彼らの方がはるかに地球環境への理解が深く、現実的に気候危機を捉えています。

教育は社会の方向を決めます。時間はかかりますが、気候変動対策として最も確実で長期的な投資こそ「教育」です。今の子どもたちが気候変動の理屈を理解し、次の世代で正しい選択をできるようにすること。それが未来の地球を守る、最も確実で持続的な方法です。

こうした状況から見てくるのは、日本で温暖化問題への関心がなかなか広がらない理由の一つが、教育の問題にあるということです。しかもそれは極めて根深い課題です。異常気象や気候変動を正しく教えられる教員が少なく、地学の専門教員自体が減っているため、「教えたたくても教えられない」という声が多いのが現実です。

しかし、だからこそ今こそ取り組むべきです。地球温暖化はもはや未来の話ではありません。教育こそが、これからの社会を変える唯一の出発点です。

本稿をお読みの方には、現役の学校の先生が多いと思います。中学や高校の地理でも気候や気象災害を学びますが、地理は社会科に属するので、理系的な要素が含まれる気候分野が得意ではない先生が多いと聞きます。このような「教えたたくても教えられない」という先生に是非お読みいただきたい本が、私の著書「異常気象の未来予測」(ポプラ新書、2025年発行)です(図6)。この本は、日本や世界の気候がどのように変わりゆくのか? どうして変わるのか? を解説した本でもあります。学校の先生や中高生に手に取っていただきたい思いで書きました。決して専門家向けの本ではありません。

● 「我慢」ではなく「楽しむ」温暖化対策を

日本は昔から気象災害が多い国ですが、現在の異常気象は単なる自然の気まぐれではありません。私はこれを「気候災害」と呼んでいます。言葉を変えるだけで見方が変わります。「気候変動に伴う災害」と捉えれば、それは人間の責任の範囲に入ります。「日本は災害が多い国だから仕方がない」というのは違います。私たち自身の活動によって地球の温度を上げてしまった。ならば、下げることもできるはずですよ。

「二酸化炭素を減らすと日本の国力が弱まる」と言う人がいます。私はそうは思いません。むしろ、脱炭素を進めることこそが日本の国力を高める道です。気候の問題を「自分ごと」に変えることが重要なのです。

では、どうすれば気候の危機を自分のこととして感じられるのでしょうか。

「地球のために頑張ろう」「我慢しよう」。そんなスロガンを耳にすることがあります。しかし、「頑張る」や「我慢する」では続きません。ダイエットと同じです。頑張るダイエットは長続きしない。温暖化対策も同じです。無理なく、楽しく、続けられる工夫が大切です。

私が提案したいのは、「面白いからやる」「得するからやる」という発想です。面白くて得をする温暖化対策こそが、長く続けられる秘訣です。楽しさやメリットを感じられる仕組みを、地域や企業の中で工夫していくことが重要です。誰かのためではなく、自分自身と次の世代のために気候の危機を真正面から捉え、行動する社会へと一歩を踏み出すこと。それが、未来の地球を守る第一歩です。

「面白いからやる」は、教育でも有効です。「勉強なさい」と子供に言っても、言うことを聞かれません。学問の面白さを、児童生徒に熱く語る。そうすれば、子供たちは自主的に「勉強」するようになるのです。子供のココロは好奇心に満ちています。「入試にでるから、勉強せよ」は、頑張るダイエットと同じで、息切れしてしまいます。

温暖化が日本を狙い撃ち、異常気象がニューノーマルとなる日本の未来。それは日本の国力をも弱めることになりかねません。だからこそ、日本こそが率先して脱炭素の旗を掲げ、世界のリーダーシップを取り他国を牽引することです。被害を受ける側ではなく、行動する側に回るべきです。そして、四季が美しい日本に戻すこと。学校教育界も、それを後押しする行動変容がもとめられます。強く豊かで美しい国、日本になるために。



図6 「異常気象の未来予測」(立花義裕著、ポプラ新書、2025年)の表紙の書影



東京学芸大学で、 私が教わった英語の先生の思い出

柏瀬 省五 (かしわせ しょうご)

岡山大学【1974年～1999年在職】名誉教授

宇都宮大学【1999年～2009年在職】名誉教授

私は、「東京オリンピック」が開催された1964年4月に、東京学芸大学中等教員養成課程英語科に入学、1968年3月に、同学部同科を卒業、引き続き、同年4月に、東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科英語教育専攻に進学、1971年3月に、同大学院同研究科同専攻を修了しました。学部4年間、大学院3年間、計7年間、東京学芸大学小金井キャンパスで快適に過ごしました。

入学式、高坂正顕(まさあき)学長の祝辞

私は、1964年4月15日、東京学芸大学体育館で挙行された入学式に参加しました。入学式での高坂正顕学長の祝辞は、私の記憶では次のようなものでした：

東京学芸大学は、それまで、キャンパスが世田谷、竹早、大泉、小金井と分かれていました。それを1964年度からは、小金井キャンパスに全部統合することにしました。皆さんは、東京学芸大学小金井キャンパスの第1回生です。この統合に際し、小金井キャンパスには一般教育講義棟4棟、人文研究室棟3棟、及び中央図書館棟等を新築し、新築建物の外側にはつつじを植え、地面には芝を植えました。そして、正門の内側、3階建ての自然科学研究室棟の東側の空き地には、多摩地区特有の高木、樺を20本、新たに植えました。これらが成長すれば、小金井キャンパスは鬱蒼とした森となり、校舎が木陰の間にちらちらと見える、ベンチでは教員、学生が思索する、静かで落ち着いた学園になります。

私は、2025年11月1日、東京学芸大学小金井キャンパスで開催された辟雍会全国代表者会議に参加しました。それを機会に、私が入学した1964年から60年余りを経た、件の小金井キャンパスを、改めて散策してみました。高坂学長の思いは大方実現して、東京学芸大学小金井キャンパスは、静かで落ち着いた学園になっていました。しみじみと懐かしく誇らしく散策しました。

I 中等教育教員養成課程英語科時代、 私が教わった英語の先生の思い出



伊賀上謙先生 1966年度特別海上英語授業
東京湾木場沖漁場で撮影

(1) 伊賀上謙(いがのうえけん)先生のテキストは、Jack London, The Call of the Wild『荒野の呼び声』でした。先生は、英文学の話より、魚釣りの話の方が好きらしく、しばしば教室で魚釣りの話をされました。特に、アユ、ヤマメ等の溪流釣りの話に及ぶと、大いに熱が入りました。何しろ、「溪流釣りの名人」を自認しておりました。毎年、秋の大学祭の時期には、東京湾に釣り船をチャーターして、当日は、前後の授業は全部休講にするよう他の先生に先生ご自身で手配し、英語科1、2年生のために「特別海上英語授業」を実施しました。私は、1・2年生の時はもちろん、3・4年生になってからも、この授業に特別参加して、「伊賀上先生の特別海上英語授業」を大いに楽しみました。誠に楽しい思い出です！

(2) 石井正之助先生には、私は、学部3年生の時、専門科目「英詩の授業」を受けました。ある時、私は、英詩の形式(A B A B C C)についてプレゼンテーションをしました。「各行の韻が、A(エー)B(ビー)A(エー)B(ビー)C(シー)C(シー)の6行詩です」のような説明をしました。そして、その授業が終了して挨拶が終わると、「柏瀬君、ちょっと」と、私は、石井先生に、ご指名で、教室の出口、廊下に呼び出

されました。そして、先生曰く「エー、ビー、シーではなく エー、ビー、スィー」と発音しなさい。ことほど左様、石井正之助先生には、いつも懇切丁寧な指導を受けました。実に実に細やかな先生でした。

(3) 江川泰一郎先生は、名著の評判が高い「英文法解説」の著者でした。全国の英語教員に分かりやすい文法解説書の著者として、絶大な人気がありました。そして、私たち英語専攻の学生の授業の「英文法」のテキストは、A5版、ハードカバー、1,000頁もある Curme の Syntax (英語オリジナル版) でした。重くて持ち歩きは難儀でしたが、が、ずっしりと重い Syntax をカバンに入れて登校する日は、英語を本格的に勉強している大学生の気分でした。江川先生曰く「尻のポケットにねじ込めるような薄っぺらなテキストは、君らにはふさわしくない。アメリカの大学生みたいに、どっしりとした分厚い教科書で英語の勉強をして、低い鼻をびくびくさせなさい!」と冷やかす半分に、学生たちを鼓舞しました。

(4) 加藤菊雄先生は、専門英語「アメリカ文学概論」の担当でした。Jack London, The Call of the Wild, Herman Melville, Moby-Dick, Somerset Maugham, Moon & 6 Pence, Margaret Mitchell, Gone with the Wind, Ernest Miller Hemingway, The Old Man and the Sea, For Whom The Bell Tolls 等を授業で取り上げ、学生を交えて、アメリカ文学の特徴を討論しました。加藤菊雄先生は、毎回、その日の授業の予定の解説が終わると、すぐ、「柏瀬君のコメントは?」と私にご指名がありました。私は、新宿や渋谷の名画座で観たアメリカ映画の感想、あるいは、白水社の Que sais-je? 文庫から、アメリカ文学の解説本を参考に、自分勝手なアメリカ文学評論をしたものです。

(5) 加藤憲市先生の授業は、「英語風物誌」でした。英文学に出てくる動植物、建築物、風物習慣等について調べて、順番に発表し合う授業でした。私はこの授業より、授業・教室外で、特別にしてくださいました「和文英訳添削会」の方がずっと好きでした。毎週、先生の研究室外の廊下に、4～5行の「課題和文」が張り出され、学生はその和文を英訳して、加藤憲市先生の研究室のレポート提出箱に投函しました。そして、翌週、加藤先生ご自身が赤ペンで添削した英文が返却されました。いい勉強になりました。

(6) 楠田震先生は、英文法を担当しました。私が2年生の頃、雄迎寮新寮紛争が激しくなって、大学はバリケード封鎖、全学休講が続いた時がありました。

東門の前で、学生が、「先生、今日は全学ストライキです。お帰りください」と告げると、楠田先生は敢然として、「私は授業をします」と、東門の脇の高さ2mばかりの金網によじ登り、乗り越えて、取り押さえようとする学生を振り切って、いつも授業をする教室に駆け込み、大声で出席簿を読み上げ、「以上、全員、欠席!」と叫んで、教室を立ち去りました。学生たちは、啞然、「あの先生、なかなか気骨があるじゃないか」と評判でした。



1964年入学中等教員養成課程英語科生全員
1964年12月 中央図書館前で撮影

(7) 柴田省三先生は、担当は「英語史」でした。それで、古英語、中英語、近代英語、現代英語まで、英語全般に精通していました。英語科の先生方はみな、「柴田先生は語学の天才だ!」と、言っていました。フランス語、ドイツ語も、英語と同程度に流暢に話しました。おまけに、ギリシャ、ラテン語も心得ていました。柴田先生は、言語学関係の専門定期行誌は、英独仏語の他、オランダ語、ロシア語、スウェーデン語などでも、購読していました。

(8) 清水阿や先生には、私は、「Shakespeare 研究」の指導を受けました。その授業のある時、私は、清水阿や先生にひどく叱られた思い出があります。小金井祭で英語科の英語劇を私が Director (監督) で、下級生と一緒に上りました。その小金井祭の翌日のことでした。清水先生の授業がありましたが、私は、英語劇上演に奮闘して披露困憊、授業に教室まで行ったものの、眠くて、眠くて、とうとう教室の一番後ろの席の椅子に仰向けに寝そべて、そして寝入ってしまいました。授業が始まると、清水先生は、私が教室の後ろで寝ているのに気づき、「出て行きなさい」と、私は、教室から追い出されました。

(9) 羽鳥博愛(ひろよし)先生には、「英語科教育法」を教わりました。実に懇切丁寧な授業でした。必ず A4 サイズの大学ノートで、「講義ノート」を作成するのが義務でした。ノートには、見出しの位置、項目を書く位置、注を入れる位置まで指定されました。

学期末には、その「講義ノート」を提出して、先生から査察確認の赤印を押してもらいました。指定通りの講義ノートになっていなければ「単位がもらえない」と、学生は恐れをなして互いにノートを見せあって、協力してノートづくりに励みました。

(10) 細川泉二郎先生について、私は、授業がどんなであったか、テキストがなんであったか、今、何一つ思い出せません。が、先生の教室内での仕草、振る舞いについては、鮮明に思い出します。長身の細川先生は、授業中、しばしば教卓に尻座りをしました。たまには、教卓の上にアグラをかくこともありました。当時、我々学生は、小中高等学校を通じて、学習机を尻に敷くなどすれば厳しく叱られる教育を受けた世代でしたので、細川先生が机に腰かけると、学生同士は、みんなそっと顎蹙顔を見合わせました。私は、「あれが英国ケンブリッジ大学留学帰りの英国風振る舞いか?!」と、大いに感動しました。

(11) 宮内秀雄先生の授業は、テキストの指定はなく、もっぱら先生ご自身が黒板に大書きする英単語の解説、あるいは、短い英文を解釈する講義でした。英語の文化的背景の解説に終始しました。取り上げる英語は、その日、その日に、先生が黒板に大書きされる。例えば、“flower”と“花”と黒板に大書きする。そして、「flowerは花じゃない」と講義が始まる。「英国人がflowerと言う時はバラの花をイメージしている。日本人が花と言う時は、サクラの花だ。だから、flowerは花ではない」と、1時間たっぷり、そのテーマ、単語について、先生の文化解説の講義でした。結局、「日英文化比較」の講義でした。そういう講義に慣れてなかった当時の私は、宮内先生の授業は、「取りつく島がない」との印象を持ちました。しかし、今になって、宮内先生が話していたことは「このことか!?!」と、思い当たることがしばしばあります。

(12) アーネスト・リクター (Ernest Richter) 先生は、英語科専任外国人講師でした。テキストは、「English 900」英会話の標準的なテキストでした。今でも思い出す授業は、“This is a book.”は（言わなくとも、見ればワカルから）ダメ。“This book is very interesting.”は（語る意義アリだから）OK。“He is a boy.”は（言わなくとも、見ればワカルから）ダメ。“He is a funny boy.”は（語る意義アリだから）OK。要するに、「言語として無意味な英語表現はダメだ」ということでした。「言語として意味をなす英語表現の用法」を、丁寧に教わりました。私が、英語学習で「文法」より「語用」に注目するのは、リクター先生の授業がきっかけです。リクター先生は、宮内秀雄先生、羽鳥博愛先生と共著で、中高校生向けの

英語教科書 Crown(三省堂)の執筆者でした。

(13) ジョン・マイルズ (John Miles) 先生は、フルブライト (Fulbright) = 日米教育交流財団からの派遣アメリカ人教師だったと思います。American Spoken English がテキストで、毎週、各章の Introduction を15行程度暗誦して、授業開始時に数名が指名されて、大声で朗読しました。先生は、学生に背中向き、黒板の方を向いて座り、学生の発音、intonation が違うと、「No, Again」と指摘。やり直しました。もちろん、日本語訳や文法の説明はありません。英語発音指導が授業の中心でした。こういう英語発音に集中した英語の授業は、私は、高校以前には受けたことなかったから、Miles先生の授業は新鮮でやりがいがありました。先生は、授業の中で、「英語は、子音が多いから、君たちが、英語発音練習をすれば、必ず唾が飛ぶ。君たちは、日本の満員電車の中では、英語発音練習は慎むように!」と言われました。私は、その教えを今でも厳守しています!(笑い)

(14) アイゼンシュタイン (Eisensteine) 先生は、私が学部3年生の時、フルブライト (Fulbright) = 日米教育交流財団からの派遣アメリカ人英語教師でした。先生は、DH ローレンス (DH Lawrence) の専門家でした。DH ローレンスは、その当時、日本でも評判の「チャタレイ夫人の恋人 (Lady Chatterley's Lover)」の著者で、大胆な性描写が評判でした。裁判沙汰になっていましたが、その映画は日本でも公開されました。先生の授業は、「英会話の授業」ではなく、「現代英米文学の講義」でした。理解できない部分がたくさんありましたが、私には大いに刺激的で、アメリカの大学の英文学の授業は、こういうものだろうと推測して、ワクワクしました。私が、英米の大学に留学したいと思うきっかけになりました。



1964年4月入学中等教員養成課程英語科生 2012年クラス会
日光高井屋で撮影

II 大学院研究科英語教育専攻時代、 私が教わった英語の先生の思い出

英語教育第一講座主指導教官

宮内秀雄先生について

私は、大学院の授業が開始される数日前、宮内先生の研究室前の廊下で、宮内先生とすれ違いました。それで、私は尋ねました。「先生、大学院の授業、英語学演習のテキストは何ですか？」先生「そうだなあ、新古今和歌集にでもするか」私「はあ、あの、英語学演習ですか？」先生「うん、だから今年は新古今和歌集にでもしよう」私は、先生が何かとカン違いされていると思い、宮内先生の授業に新古今和歌集は持たず手ぶらで、予定の時刻に宮内先生の研究室に行きました。同じ授業を受ける予定の先輩学生が既に研究室にいて、講義は開始されていました。黒板に「心なき あわれは身にも 知られけり 鳴立沢の 秋の夕暮れ」と書いてあり、その横に、鳴らしき鳥の絵も描いてありました。「ああ、やっぱりテキストは、新古今和歌集か」と思い、「これが英語学演習の授業か?!」と、怪訝に思いながら、最後まで黙って講義を拝聴しました。授業が終了して、私が研究室を出ようとする、宮内先生が私に向かって「柏瀬、お前には、俺の授業は、聞いても わからんだろう」と。私は「はい」と率直に答えました。すると、先生は「お前、何を勉強しているんだ？」と尋ねたから、「柴田先生の所で、Chaucer 講読と英語学の論文をフランス語ないしはドイツ語で読むことになっています」と答えました。宮内先生「ふん、それならそれでいい。もうおれの授業には来なくてもいい。柴田君の所で、よく勉強しろ」と言われました。それで、その後は、私は、宮内先生の授業は時折のぞく程度、宮内先生の授業の時間は、隣の柴田先生の研究室で、Chaucer、Canterbury Tales の講読と、ヨーロッパの英語学専門雑誌に載った、フランス語かドイツ語の論文読みに熱中しました。ところで、また、年度末に、廊下で、宮内先生にお会いしました。すると、「おい、お前、柏瀬だったなあ、お前、俺の授業の単位は欲しいのか？」と言われる。私は「はい、お願いします」と言う。「そうか、じゃ、Cだ」と言われた。私は、「ありがとうございます」ということで、しっかり、「宮内先生の英語学演習の成績はC」でした。

英語教育第一講座副指導教官

柴田省三先生について

こんな風で、私は、主任指導教官、宮内秀雄先生の授業は”みんなパス”でした。その代わりに、副指導教官の柴田省三先生には、その分も合わせて、朝から晩まで、懇切丁寧にご指導を受けました。柴田省三先生の大学院の授業は、授業予定表には、毎年、土

曜日の午前中が指定されていましたが、実際、土曜日は、午前中はもちろん昼食も一緒にして午後も授業。午後一服入れたくなると、「場所を代えましょう」と、アルコールが飲める街中の店に移動しました。それでも「授業は継続」。夜も、「授業」をして、とうとう終電で先生をご自宅にお送りしました。私は、先生をご自宅にお送りした後、帰る電車がいないから先生のお宅に泊まって、朝には先生のお宅で朝食を頂いて、朝帰りしました。こんなことは、しばしばありました。



1966年11月小金井祭 英語科全員で英語劇上演
"Happy As Rarry" By Donagh MacDonagh

III 付記 1967年度小金井祭で、 英語科生全員による英語劇上演

私が入学した1964年当時の英語科では、毎年小金井祭(11月1日～3日)に、1年生～3年生まで全員で、英語劇の上演が伝統でした。私は、1年生の時は、ShakespeareのMidsummer Night's Dreamのking役で出演しました。2年生の時は、Eugene O'NeilのBeyond the Horizonで、私は、大道具・小道具等の裏方でした。そして、3年生の時は、私がDirector(監督)で、アイルランド若手作家Dona Macdonaghの、韻を踏んだ英語詩劇: Happy as Larryを上演しました。4月に登場人物を決め、5月にセリフ朗読練習を開始。夏休みには伊豆大島に合宿して練習を重ね、10月には、大学の教室で夜遅くまで演技練習を重ね、小金井祭当日は大奮闘でした。



令和7年度 学校訪問事業（東京学芸大学・東京学芸大学辟雍会共催）

「先輩たちのいる学校を訪問しよう！」

① 青陵中学校・高等学校 （東京都品川区）

〔日時〕 令和7年9月8日（月）

〔参加人数〕 学生3人・院生1人



② 成城学園初等学校 （東京都世田谷区）

〔日時〕 令和7年9月19日（金）

〔参加人数〕 学生7人・院生2人



③ 多摩大学目黒中学校・高等学校 （東京都目黒区）

〔日時〕 令和7年9月24日（水）

〔参加人数〕 学生7人・院生1人



④ シュタイナー学園高等部 （神奈川県相模原市）

〔日時〕 令和7年9月29日（月）

〔参加人数〕 学生1人



例年実施されている学校訪問事業「先輩たちのいる学校を訪問しよう!」は、本年度も9月と10月に行われました。今回は例年になく訪問する学校が多く8校となりました。以下、学校訪問の概要です（訪問の様子については辟雍会のホームページに掲載されています）。

⑤ 文化学園大学杉並中学・高等学校
(東京都杉並区)

[日時] 令和7年9月30日(火)

[参加人数] 学生5人・院生1人



⑥ 富士見市立つるせ台小学校
(埼玉県富士見市)

[日時] 令和7年10月1日(水)

[参加人数] 学生4人・院生1人



⑦ 国際基督教大学高等学校
(東京都小金井市)

[日時] 令和7年10月7日(火)

[参加人数] 学生6人・院生1人



⑧ 玉川聖学院中部・高等部
(東京都世田谷区)

[日時] 令和7年10月9日(木)

[参加人数] 学生10人・院生3人



*予定していたボツワナ国の国立中学校へのオンライン訪問は日程の調整がつかず中止

辟雍会諸規程（支部活動支援及び学生表彰）

本会は昨年度と今年度に2つの規程を定めております。以下、支部活動への支援と学生表彰に関する規程です。

東京学芸大学辟雍会支部活動支援規程

（趣旨）

第1条 この規程は、東京学芸大学辟雍会（以下、「辟雍会」という）が、辟雍会の都道府県支部（以下、「支部」という）の活動支援を目的として、必要な事項を定めるものである。

（支部活動支援の内容）

第2条 支部活動に対する支援の内容は、次の各号とする。

- (1) 支部総会及び支部懇親会等への辟雍会役員への派遣
- (2) 支部設立活動の支援
- (3) 支部活動における通信費等の支援
- (4) 支部で企画する講演会・展覧会等に対する支援
- (5) その他、各種の支部活動に対する支援
- (6) 辟雍会刊行物等の送付
- (7) 辟雍会備品の貸与（辟雍会の旗等）
- (8) 東京学芸大学現役学生の支部活動参加に対する支援
- (9) 支部活動に資する各種情報の共有

（役員への派遣）

第3条 上記（1）号に定める辟雍会役員は、会長、副会長、もしくは理事とし、派遣の可否及び派遣者の決定は、その都度会長が行う。

（活動支援金等の交付）

第4条 上記(2)・(3)・(4)・(5)各号の活動支援金の交付は、各支部毎年一件までとし、一件につき5千円とする。なお、第（4）号に関連して、講師等の派遣や作品の提供等についても協議事項とする。

2 上記(6)号の刊行物は、次のものとする。

- (1) 機関誌「辟雍」
- (2) 辟雍会入会案内の小冊子
- (3) 東京学芸大学応援歌「若草もゆる」のCD
- (4) 辟雍会ネーム入りボールペン

3 上記(7)号の備品は、次のものとする。

辟雍会のネーム入り幟旗（10枚）

4 上記(8)号の学生に対する支援規定は別途定める。

（支援要請の方法）

第5条 上記の活動支援の要請は、支部より辟雍会会長に対して書式自由の申込用紙（ファックスまたは電子メールにファイルを添付することも可）により行うものとする。

2 要請の時期は随時とする。

3 採択の可否は、辟雍会運営委員会で決定し、その結果はすみやかに支部代表に通知する。

（規定の改廃）

第6条 この規程の改廃は、辟雍会の理事会の議を経て、辟雍会会長が行う。

（雑則）

第7条 この規程に定めるもののほか、必要な事項は、別に定める。

附則

この規程は、2024（令和6）年12月11日から施行する。



東京学芸大学辟雍会学生表彰規程

(目的)

第1条 本規程の目的は、東京学芸大学辟雍会（以下、「辟雍会」という）が、教育研究活動、芸術・スポーツ活動、社会貢献活動等（以下、「諸活動」という）において顕著な成果をあげた東京学芸大学教育学部、東京学芸大学特別支援教育特別専攻科、東京学芸大学大学院教育学研究科及び東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の学生や院生（以下、「本学学生」という）を表彰し、もって本学学生の諸活動に対する意欲を喚起し、その能力・資質の向上に資さんとするにある。

(表彰対象者及び表彰対象となる成果)

第2条 表彰対象者は、次の各号のいずれかに該当する本学学生とする。

表彰対象者は、次の各号のいずれかに該当する本学学生とする。

- (1) 辟雍会活動において顕著な貢献をした者
- (2) 教育研究活動や芸術・スポーツ活動において注目すべき成果をあげた者
- (3) その他、社会貢献活動等において注目すべき成果をあげた者

2 表彰対象となる成果は、本学学生が本学在学中に有形・無形に生み出した成果で、その発表（公表・報告・出展・公式記録等）時から1年以内のものに限る。

(表彰対象者の推薦)

第3条 表彰対象者の推薦は、辟雍会各部部长あるいは本学各教育組織の代表者及び本学附属学校園の長のいずれかが推薦書を提出する形で行う。

2 推薦書は辟雍会が指定する書式に従うものとする。

3 表彰対象者の推薦は随時行うことができる。

(表彰者の決定及び公表)

第4条 辟雍会運営委員会は、提出された推薦書に基づいて審査し、表彰者を決定する。

2 表彰者数は毎年原則として若干名とする。ただし、共同制作や団体活動の場合はこの限りでない。

3 運営委員会の審査結果は速やかに公表するものとする。

(表彰の方法と表彰内容の公開)

第5条 表彰者の表彰は、東京学芸大学ホームカミングデー中に開催する表彰式において行う。

2 辟雍会会長は表彰者に対し表彰状を授与し、併せて記念品を贈呈する。

3 辟雍会は、学生表彰の内容を辟雍会の広報誌やウェブサイトを通して広く公開することができる。

(規程の改廃)

第6条 本規程の改廃は、辟雍会運営委員会の議を経て行う。

(雑則)

第7条 本規程に定めるもののほか、学生の表彰に関し必要な事項は別に定める。

附則

1 本規程は、2026（令和8）年2月5日から施行し、2026（令和8）年4月1日から適用する。

2025年度 各部活動報告

● 総務部

総務部は次の6項目を柱に、全体的な連絡調整を行っています。

- 1 全国代表者会議、理事会、運営委員会・幹事会の開催
 - ・全国代表者会議（2025年11月1日開催）
 - ・理事会（2025年5月24日開催）
 - ・運営委員会・幹事会（随時開催）
 - ・会長候補者推薦委員会
（2025年9月から2026年2月まで3回開催）
- 2 東京学芸大学との連携
 - ・大学との意見交換会（2025年6月26日開催）
- 3 既存の卒業生組織等との連携（総会・新年会等）
 - ・一般社団法人東京学芸大学同窓会総会
（2025年6月8日S410教室で開催）
 - ・一般社団法人東京学芸大学同窓会新年祝賀会
（2026年1月25日開催）
- 4 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務
- 5 辟雍第22号、予算書、決算書、事業計画書等の発送
- 6 規程等の整備・見直し
 - ・東京学芸大学辟雍会学生表彰規程の制定

（総務部長 手塚 穰治）

● 会計部

会計部は予算の作成及び執行を中心に活動しています。

- 1 予算の適正かつ効率的な執行
- 2 2026年度予算の計画
- 3 的確な会計事務の実施

（会計部長 清水 研司）

● 広報部

広報部は機関誌の発刊を柱に次の活動を行っています。


- 1 機関誌『辟雍』（第22号）の発刊
印刷・製本2,500部（新入生・新卒業生・希望者）
- 2 大学行事での広報活動
辟雍会紹介リーフレットの作成（2,000部）
- 3 ホームページの監修
- 4 広報活動としての支部訪問計画

（広報部長 小澤 一郎）

● 組織部

組織部は会の組織拡大に努めています。

- 1 支部設立事業（京都府・山形県・沖縄県・東京都）
- 2 既存支部の総会、会合等と連携
- 3 卒業・修了生への記念品配付と既存支部の案内
 - ・2025年9月30日及び2026年3月19日配付

- 
- 4 新入生未納入者への会費納入依頼
 - ・2025年6月24日に466通発送、2025年11月30日までに43名が納入
 - 5 教職員への会費納入依頼
 - ・2026年1月に正会員手続きのご案内を配付
 - 6 リエゾンオフィスの管理

(組織部長 二宮 修治)

● 事業部

事業部は年間の事業計画を実施し、在学生中心の新事業を構想中。

- 1 学生のキャリア支援事業
 - ・学生の辞職会学校訪問事業
(対面式8校を実施、オンライン訪問1校は今年度中止)
 - ・教員就職支援事業
(附属図書館「教職支援コーナー」書籍購入支援)
- 2 会員支援事業
 - ・学生企画事業の支援
 - ・在学生の支部活動参加学生旅費支援
 - ・支部活動支援(支部活動支援費の支出開始)
 - ・新入生歓迎事業学芸ロゲイニング支援
 - ・学生表彰事業支援
 - ・学生リポーター支援(本年度は4人)
- 3 ホームカミングデー共催事業
 - ・2025年11月1日に立花義裕三重大学大学院教授の講演会を開催
- 4 キャンパス環境充実支援事業
- 5 東京学芸大学辞職会修学支援金事業
 - ・貸与型支援
 - ・給付型支援
- 6 構内共用ピアノ設置事業
- 7 施設計画事業
(検討会を開設し、現在までに3回開催)

(事業部長 荒川 悦雄)

● 情報化推進部

情報化推進部は会員からの情報発信により辞職会を盛り立てます。

- 1 ホームページの管理・運営
 - ・ウェブサイトリニューアルアップデート管理
- 2 情報化推進
 - ・卒業・修了後の参加希望支部情報をオンライン収集
- 3 リエゾンオフィス整備
 - ・リエゾンオフィス用サーバー計画
- 4 データベース構想
 - ・指導案の収集、整理、及び公開

(情報化推進部長 荒川 悦雄)

「辟雍」の由来

「辟雍」（へきよう）という本会の名称の由来について、『辟雍』創刊号に次のように紹介されています。

「辟雍」とは古代中国における「大学」のことなのです。周代といえますから、約3000年前の古代です。大学に相当する機関は、東序（とうじょ）・瞽宗（こそう）・成均（せいきん）・上庠（じょうしょう）・辟雍（へきよう）の5つに分かれていました。そのなかで中央に位置していたのが「辟雍」です。それで後に辟雍が大学の代名詞として用いられるようにもなりました。辟雍は天子が学問を教えられたり、儀式を行ったりする場所であり、他の4つで音楽・舞い・礼儀などいわゆる六芸を教えたといえます。

「辟雍会」の名は、そんな故事にちなんで第一部中国文学の佐藤正光助教授が命名されました。大漢和辞典（諸橋轍次著・大修館書店）によれば、

「辟」には57通りの意味があります。良い意味もあれば悪い意味もあります。中に「たま」というのがあり「璧に通ず」と述べられています。璧とは宝物のことです。「雍」にもやはり様々な意味がありますが、ここでは「睦む（むつむ）」という意味を採りたいと思います。

東京学芸大学の宝物は言うまでもなく卒業生です。また在校生や教職員の一人ひとり、つまり東京学芸大学に関わるすべての人間こそがかけがえのない宝物です。ですから「辟雍会」は、大学の宝物である多くの人たちが集まり「睦みあう」場であると考えられます。本来の意味は「明達諧和」とのことです。

『辟雍』創刊号（2004.10.30）より

この紹介文にあるように、「辟雍」の命名者は、当時の本学助教授の佐藤正光先生です。佐藤先生は中国文学の研究者として学生指導に当たっておられる一方、本学附属の国際中等教育学校の校長を務められました。その間、本会の活動には常に関心をもって見守っておられました。2024年の6月に逝去されました。享年63歳でした。

あとがき

2017年4月、本学入学式で、当時の出口利定学長は式辞の中で「海外日本人学校では、東京学芸大学の卒業生が来てくれることを希望されている学校が非常に多くあります」と述べました。今日、学生たちは国内に留まらず、海外で自身の教育力を発揮しています。今号では、学生に限ることなく、国境を超えた地域に貢献する姿についても知ることができます。辟雍会会員の幅広い活動が、よりグローバル化していると感じます。

さまざまな分野で活躍する会員の活動から刺激を受け、明日に向かう活力を得ることができれば幸いです。

小澤 一郎

東京学芸大学 辟雍会 機関誌

Hekiyou

2025 vol.22

発行人 馬淵 貞利
編集人 小澤 一郎
編集協力 松川正樹 大澤 一美 八木澤 弘子
デザイン 正木 賢一メディアラボ
印刷所 (有) サンプロセス



〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1
20周年記念飯島同窓会館 2階
TEL/FAX 042-321-8820
E-Mail hekiryou@u-gakugei.ac.jp
ホームページ www.hekiyou.com



ハイズ
HIVE (「ミツバチの巣箱」の意味で、みんなが集まるところを指す) 棟 (別名東8号館 野球場の南にある) の露地ピアノ
この大きな木造構造物は産学連携事業により孫泰蔵氏のミスルトウ (mistletoe: やどり木) 株式会社からの寄付で建造され、現在も建築途中である。



[辟雍] 第22号 東京学芸大学 辟雍会機関誌
www.hekiyou.com

